川柳雜誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-linon

The Senryu Zasshi

No.325

六月號

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿九年六月一日發行第九卷第六號（毎月一回一日發行）
創刊大正十三年通卷・三百廿五号

六月號目次

（昭和二十九年）

題字……麻生路郎
表紙……米田三男之介
この雨に……麻生路郎…（三）
閑谷学校見学記……北川春巣…（一〇）
金婚式……福田丁路…（一〇）
平通盛と教經……富士野鞍馬…（一六）
一句弐万円也……若本多久志…（一二）
短詩型文学の結社は解散すべきや……品川陣居…（八）
新川柳考察……大森風来子…（一三）
会陽はたのし……久保和友…（一四）
脱皮……藤本満年…（一二）
人間横丁（XIV）……東野大八…（一四）
安全の知識と川柳……丸尾潮花…（一六）
夢裡さんを憶う……西いわを…（二〇）
女と云うものは……藤本茶々…（二二）
川柳人の世界巡り……白砂旋風…（二三）
川柳第二教室……戸田古方…（二七）
BK放送川柳……麻生路郎選…（九）
いのち五題……福田山雨楼…（二二）
飛燕往来……（三三）
全国川柳大会表彰式……（一五）
★
川柳塔……麻生路郎選…（四）
同舟近詠……諸家…（七）
近作柳樽……麻生路郎選…（一六）
一路集
「転勤」……宮田不二選…（二四）
「利子」……河村日満選…（二五）
各地柳壇……（二八）
不朽洞会から……（三五）
柳界展望……（三四）
公私雑記……（三五）

この雨に

麻生路郎

ビキニだの、死の灰だの、放射能だの、ガイガー計数管だのと云う単語が近ごろ登場したが、短歌のたらちね派や俳句のやかな派などと違つて川柳ではそれ等の単語をすぐ消化して、ものにするところが面白い。

この雨に帰らしやんすか放射能

といつた具合に――。

「週刊朝日」で徳川夢声と堀内敬三の対談で、ナマの放送のことを云つているが、私はそれをいつも放送局で話して見るが一向採用されない。原稿放送なんて戦時の思想取締の遺物でしかないし、録音はナマと違つて気魄がない。少々云い間違つてもナマだと聴取者に迫つて来るものがある。川柳の放送なんてナマでなければ、たなざらしの浴衣のようにあじ気ないものになつてしまう。

私は五月七日にBKで川柳の録音をした。ところが病後なので途中で声が嗄れて来た。係の安藤女史が気を利かしてお茶をだまつて差し出して呉れた。それをうまく飲んだつもりでいたら、あとで聞いたらゴクッと云う音が這入つていた。

途中で少々声がかすれてもいるし、お茶を飲んだ音もするし、やりかえますかと云うことであつたが、私は放送局の方で差支えなければそのままにして下さいと云つた。その方が面白かつたからである。

○

病臥した数日間、タバコが私のあたまに浮んで来なかつた。数日後に、フト気づくと、私のユビに一本のタバコをはさんでいた。そしてたちどころに五本ばかり喫つた。コレで私の病気も峠を越したなと思つた。こんなことを面白く感じるのは私が川柳人であるからであろうか。

○

芝居や映画を観て句を詠む作家がいるが、多くは、それを事件的に取扱うか、感傷的に詠んでいるのに過ぎない。作者はその劇の中に新らしく人生を発見するのでなければ、その作品が第三者を動かすに足らない句に終つてしまうことを知らねばならない。

○

近ごろは新聞の挟み広告が殖えた。朝、新聞をひろげるとバラ〳〵二、三枚。大ていい市場の特価デーの特価品のお知らせに、家庭用ミシンの月賦販売、附近の医師の開業案内、銀行の一口千円の貯金のすゝめ、そこへ、服装品の十ヶ月払いの月賦販売と云つたものである。市場のビラは私には用がない。銀行の一口千円で三十万か五十万かが当ると云うビラは、それが万が一どころか、十万が一ぐらいに当るにしても多少の魅力がないこともない。もし、ひよッと当つたら、川柳に使つてやろうと云うさもしい気を起すからである。しかし、そのビラがきまつて日曜の朝這入つているので、月曜の朝になると、もう貯金なんてケロリと忘れている。どうせ千円の金を半年寝さして十八円か二十円にしかならないことがハッキリするからである。せめて日曜の午前中だけでも、この係が出勤して営業すれば散歩がてら三十万円か五十万円の夢を楽しむ人が相当いるだろうと思うがどんなものだろう。その点、十ヶ月払の方は、日曜でも営業しているので相当セイセキをあげているらしい。この方は千円貯金と反対に高い利子をとられても、背広やドレスを先に受取れるのが若い人達の魅力なのである。こんなビラを見るたびに思いうかべるのは虚白の

レディーメード合わぬところは口できせ

と云う句である。これも川柳の持つ一つの魅力に違いない。

川柳塔

大阪市　市場汲食子

口止めに呑ますにしては吝な額
耐乏をよそに恒例私鉄スト
女医さんの憂うつ櫻見んじまい
清貧にあまんじ汚職の名から漏れ
汚職々々日本が負けた事忘れ

尼崎市　水谷鮎美

春の風聞き違いして別れたり

池田市　戸田古方

先生きやはつたでえ投げ出した足ひつこめる

横浜市　福田山雨楼

ワンマンは詰むまで駒を進める気
市になつてまだ出る熊をもてあまし
そうゆすつてくれるな一番線の貨車
白血球が増えるから笑えと云う

ホノルル市　内藤草一郎

愛情にしては嫉き方すごすぎる
弱点を突いていよ〳〵嫌われる
賃上げで初めて社長の顔を知り
口紅へ映画雑誌の型を撰り
家庭的な音に時計を振り返えり
雨降れど春春なりの呑み心地
ちよと踏める顔へ盃皆が差し

米子市　三鴨美笑

酔どれを放つて帰るは婦人づれ
買わされるものは野球のものばかり

鳥取市　大西八歩

俺の子を使うにさえも上手下手
鼻先きの雪を淋しく旅にいる

大阪市　須崎豆秋

アメリカのおつしやる通り判を捺し
青空へ大という字を書いて見た
死の灰へぼうぜんとしている学者

大阪市　正本水客

すうどんの音うまそうにうまそうに
座布團も別につくつていて臭れた
全盛時代の洋服屋におじぎされ

池田市　黒川紫香

怒るのに鉛筆がいる課長なり
旦那とは栄養過度の人でした
靴の泥残して押賣帰るなり
心中をする気子供に何か買い
退院の街はきれいな雨上り
如才なく妻をお宅へ伺わせ

大阪市　丸尾潮花

恩師の病床を想う

面会は謝絶のまゝで櫻もすみ
運ちやんはいゝな櫻の山をぬけ
花櫛がふるえる恋のしぐさする
先生も師匠も病んでもうつつじ

大阪市　北川春巣

百坪の土地幼稚園思いつき
恩師から旧仮名使いのはがき来る
横綱の病名までも知れ渡り
一合で本当に酔うて羨まれ
病人をおいてきぼりに春が過ぎ

奈良県　尾崎方正

悪い道に何の苦業ぞハイヒール

下関市　櫻川不水

靴磨アチラですなと拭いてやり
どんじりで出て住友の副社長
金のない明治生れは放つとかれ

大阪市　清水白柳子

月光ぼさつ開眼

失業が羨ましがる首をつぎ
姿だけ一休めいて街に出る

岡山市　大森風来子

愛生園にて

トヨペット島の埃りを少したて
みゝすなどくわえてひよこませてくる
玄関で小さな汚職置いて去に
植木屋が妻の心を春にする

大阪市　水谷竹荘

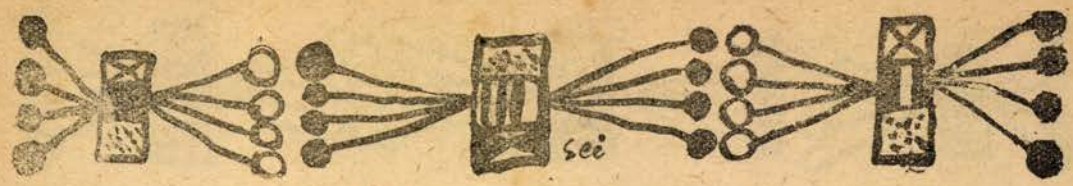
一級でなくても酔えば同んなじさ

下関市　弘津柳慶

ランドセル開けて見閉めて見背負つて見
今更に戦死した子の愚痴となり
ふさいでる娘へ母はさからわず

鳥取市　杉谷湖山

殿様はいづこお城は花ざかり
いけるらし和尚衣を脱いで坐し



憂さ晴らす酒には弱きからだして
宇部市　国弘半休

親権を放棄したよな「さん」をつけ
商才は大阪弁で育つた娘
正直も一杯飲めば愚痴を言い
兵庫県　小西無鬼

信仰へ今日を謝る事多く
無理をした金とも知らず荷は届き
大阪市　吉田斜水

黄昏の車窓から見る灯の恋し
大阪市　山口秋花

お見事な手腕のようだが危ぶまれ
今までの顔で出すから血を吸われ
尼崎市　小林文月

バスガール時々客にマイク貸し
閉会は副会長にまかせとき
大阪市　冨岡淡舟

悲しみに堪えなんとする酒なるか
完納の税金議員に呑まれたり
晒首の様にされてる土耳古風呂
奈良県　飯降白香

火気のない火鉢で話はづむなり
静かなる春の夕の声をきゝ
無花果におむつが沢山ほしてある
宇部市　長野井蛙

闇米のルートも確かと引継がれ
花の下明日のくらしには触れず
岡山県　直原七面山

肉体の強味へ娘気が付かず

カクテルグラスに女の指の艶めいて
市役所に勤めています破れ靴
大阪市　西森花村

幼稚園めだかのように散つてゆき
まま事の莚の端におばあさん
鳥取市　河村日満

二日酔禁酒とまではせめて来ず
お嬢さんにまでペコ〳〵と四十過ぎ
花に名をかつて会社に奢らせる
東京都　藤本満年

故郷からの客は嵐のように去に
汚職さえ出来ぬ下層に生きており
税金で派手に赤坂行てみたや
子の手紙親は達者なものと決め
月賦ではくれぬ正札見て通り
鼻声を落語で女教えられ
岡山県　福島鉄兒

嫁がせた後の月賦がまだ続き
鶏でも飼いましようかと老妻の
つゝ抜けに聞こえる壁で新世帯
牧方市　一塩浜一路

療養雑詠

十九貫の方が患者としてベッド
肺を病むサラリーマンよ何処へ行く
鳥取市　青木遊星

太いつるに実のつたおかげで入学し
個性を生かして会社くびになり
神経が太く養子も気楽なり
岡山県　横部牛歩

二千円まさか証文とも云えず
改札を出る間も腕を組みたがり
延期とは知らずに行つた間の悪さ
不機嫌なマゝだけ虹を見に出ない
二次会に迄附合うて処女と云う
延着のバスを待つてる花の下
岡山市　服部十九平

旧家から貰つた嫁のスローモー
棒紅の乾きかなしき肺を病み
濡れて行こうと出れば春雨やんでおり
大阪市　足立春雄

御堂筋春が来て居た年度末
臨終の患者は俺と同い年
高知市　大西迷窓

たまに連れて出れば欲しがる洗濯機
へそくつてくれたで買えた乳母車
下関市　坂田良坊

水爆のかまえで労組立ち上り
下関市　石川侃流洞

下つ端の判コが物言うのも役所
社の不満妻へこぼして寝るとする
汁粉屋へ行くにも連れのいる娘
大阪市　安岡珊枝郎

ばい〳〵のとても上手な二号の子
悪いくせ一つ宛止め老いて行く
一もうけする気政権取りたがり
考を纏めて見たく一人呑む
あの人もあの妻君で落着いた

肩書を忘れのれんの酒に酔い　広島県　山田季贅

世話好きへ硯まかせて飲む話
酔うて居る証拠背廣に春の泥

金の事話せば話逆轉し
縁談へ税金込みで話される　大阪市　山本葉光

人情を解し役目が嫌になり
掌を合す感謝がふつと芝居めき　倉敷市　木村千容

猫脊へ妻は自轉車やめと云う
妻の座の根太く一家平和なり

はいつたら困るが試驗受けさせる
浪人一年第二志望へやつと入り

盆栽に水やるあいだ無我の境　倉敷市　田垣方大

子牛にはバスが初めてだつたらし
下つ端が源氏鶏太を読みふけり

宝石部妻の歩調が憎らしい
画家ですかなるほど蔦が壁を這い

撥おいてあんたいけるともう見拔き　石川県　那谷光郎

辻八卦近頃汚職の顔も貼り
嘘発見器代議士にも使いたい

家建てたばかりに汚職の目で見られ
汚職連の藝を女將はみんな知り　大阪市　木村水堂

妻の愚痴酔うた耳には苦にならず　堺市　八木摩天郎

せちがらい世に哲学の倫理のと
恋それもよしと思えり夏の風　高槻市　福田丁路

問答無用と税務署差押え
親の目をかすめて夫婦気どるなり

痛いとこ突かれあえなく野に下り
ストリップ最後の線は守るなり　倉敷市　水谷谷水

女給させといて一人前に妬き
理不盡へ良人があると言つちやつた

マダム陽気明日は人手に渡る店
男後家ぎつちよで葱を切つていた　倉敷市　椙原一善

親の眼で見ても長男たよりなし
野荒しの足跡へ夫婦でしやがみ　岡山県　田村藤波

遅刻して誰はばからぬ椅子に居り
手傳が子供を連れて来て泣かせ　岡山県　岡田夜潮

干竿を外す女に花が散り
先方が露骨に出れば露骨に出

轉勤の知らせに夫婦喧嘩止み　岡山県　臼井三林坊

妻の座を守り通した白髪なり
夜市から沽券にかゝる物を買い　岡山県　岡村牛耕

初から褒めすぎた嫁もてあまし
お茶の日は歩きようまで変つて来

着物とは云わずお花見止しましよう

ライバルへだけは皮肉がピンと来た　茨木市　下山清潮

入学が済めば遠足待ちかまえ
鮒釣つて鮪に変える休業日

日曜を子もはつきりと知つて来た　岡山県　本田惠二朗

姪達に映画批評でへこまされ　大阪市　眞鍋一瓢

無理強いはせんよと猪口は伏せられた
気の毒さあれが淑徳説くお顔

お姜の顔へも春の紫外線
欠陥を子までがあばく不倖せ　京都市　松川杜的

フラッシュを素直に受けている舞妓
娘十六闇米かつぐ腰が出来

パチンコに勝つてもバット喫う生活
療養所櫻は妍を競えども　大阪市　永田六龍子

春なれや庭の名もなき花開く
花見とは云わず墓參の賜暇願　鳥取県　日置文郷

東京でやくざをしてる子と知らず
こり性の社長へ參考書が並び

春の陽へふと逆境を忘れたり　大阪市　佐野白水

ジャン〳〵横町鞄ひつたくられそうな
五尺八寸二つに折つた御挨拶

商賣と知つて白衣へ振り向かず　大阪府　小池しげお

好きだとは云えずに今日も亦わかれ
腕時計の音も聞える妻の留守
浪花節かけてもろうてサンルーム
ハハーンもめているなと新人の思えらく
兵庫県　竹内圭三

女子医専恋を知らない顔もおり
労規法の事にも女中ちよつとふれ
倉敷市　松村万古

餞別を一駅越して勘定し
味よりも栄養本位娘の料理
教養の所爲か学歴気に掛けず
子供にも好かれる継母へほつとする
倉敷市　藤井春日

貯えが出来りや意見もして見度く
盛会でしたと折詰届けられ
大阪市　木口賀峰

上棟式宮司と社長だけに椅子
早く来てうしろの方へ腰を掛け
時代劇観ている頃は罪がなし
岡山県　岡本緑風子

木堂の肉筆祖父の語り草
父で行く母校の柱にあつた瑕
里帰り卵すくめで持てなされ
岡山県　津田麦太楼

置き去りの米にポリスの非力なり
女房へ土産の鮨の乾からびる
かつぎ屋のように田舎の母が来る
長閑さは汽車の煙を麦が吸い
朝刊をギュッとしごいて路地は明け
米子市　小西雄々

祖母達者カレーライスを箸で喰う
場内の雰囲気代読から崩れ
岡山県　浜野寄童

出発へ母くどいこと〳〵
先生の座席ここにもとつて有り
テレビ館子供の列がくずされる
吹田市　橋本幸男

より添つて二人でぬれた京の町
堺市　高崎雄声

家故の一家心中寒う読み
岡山県　三枝一策

ニタ〳〵と笑えば安く見て取られ
明き盲目挿絵で何も彼も悟り
絵の様な姿へ顔のなかりせば
診断の結果隣りが寄り付かず
後から親の名前で呼ばれたり
大阪市　森文夫

交際費だけでは足らぬ恋になり
もう生まぬつもりぼろ〳〵のおむつ
大阪市　吾郷玲人

今日までの苦節を笑う支店長
繃帯を巻かれてクサル男の子
岡山県　岡田青果

保健所にこんなに蠅がいて呆れ
上役はどれも汚職の顔に見え
白酒の猪口はこうしてなめるもの
大阪市　若本多久志

女五十ハンドバックがまだ欲しい
お返しのない孝行を子につとめ
笛を吹き手を振り巡査無我の境
拾円位は書いてあるハガキくる
岡山県　森川東南

花かげに帯締めなおす程に酔い
涅槃会へ散る花もあり咲くもあり
岡山県　小原宇柳

髭を剃ることへも妻の気がとがり
女教師の恋を汚ないものに見る
再出発やつと牛置くまでになり

同舟近詠

松山市　前田伍健

ぼんやりと虹を見て居る早泊り
忘れてたそうか私の誕生日か
世を笑い乃木さんに似た遍路行く
大阪市　橋本緑雨

銭湯はながいのでなしパチンコ屋
出世した子を囲むべく下駄がよる

OSK
毛織物
既製服　製造卸商
株式会社　大坂商店
大阪市東区糸屋町一丁目二
電話東㊷一七四五番

短詩型文学の結社は解散すべきや

―本誌倍加運動に際して―

品川陣居

さいきん東京朝日に江口榛一(しん)というひとが、〝結社解散論〟というものを書いて歌壇、俳壇からいろいろ非難抗議されている。

江口氏の論旨の大体は、歌壇俳壇の結社にぞくすることは「日本の民主化が実現しそうでいてなかなか実現せぬ、その原因はいろいろあろうが、ぼくは歌人俳人たちのつくっている結社もそれを阻んでいる大きな原因の一つではないかと思うのである」というのが書き出しで、「それは門外からのおく測ではない。青少年時代を通じてあるかなり大きな短歌の結社に属していたし、またこの数年、さる大結社の雑誌に同人として席を置いていて、結社の毒を身にしみて感じたからのことなのだ。全くやりきれない」とつゞけているが、これは可也爆弾的な発言となった。

もう少しぬいてみると、「短歌俳句のあらゆる結社はつぶさなければならぬ。日本民主主義のガンである、そう断じて差支えない。何となれば、そこには人間としての対等の横の関係はほとんどなく、縦の関係、即ち師弟・先輩後輩・同人準同人会員・出詠欄の上下、といつた一貫した関係のみによつて、万事が処理され運営される。例外として多額の寄附をした者は一足飛びに同人になつたり、発言権が強化されるのは腐敗をうたわれているどこかの政党と酷似している。」と極言しているが、これについては、短歌なり俳句なりの結社の人たちが駁論をぶつつけているから、のちにゆずるが、ぼくなどが耳にはさんでいる〝実情〟というものと照らし合せてみると、そこに封建性というものがあるようである。

ホトトギスの虚子御大が、たとえば、旅行されるような場合でもあると、その地方の有力同人が手車にのせるようにして送迎する様は、虚子翁みずから筆を執つて、〝小説作品〟として発表している。それをぼくたち一般読者がよんで、そこに師弟の情誼厚いものを感じて打たれるのであるが、それは、あくまで小説作品としてゞあつて、それを裏返してみると虚子翁を包んでいる封建性の強さに、むしろ呆れもするのである。九州旅行の際などは、一女性俳人が、かゆいところに手のとゞく世話をするのみか、各地の旅行先々まで虚子翁の足跡を追つて歩き、別れには泪をさえうかべているのである。

虚子翁は、それらの情景を、例の写生文のウンノウを傾けて淡々と叙しているので、いやみというものは比較的感じられないのであるが、ぼくたちが、現実の世相に当てはめてみて、まだこういう〝世界〟があるものかと感じ入るのである。

ぼくたちの柳壇にも、かつて―戦前も遠い時代には、こういう風潮がなかつたとはいえないが、その時代は今日のように〝民主主義〟というものが社会生活の基準ではなかつたし、情誼とか義理人情という感性的なものが幅を利かしていたので、それらに縛られて行動した面も批判されはしなかつた。だが一部若い人たちの間には、「大家」とか「先生」と呼ばれるだけで作品行動に熟慮を示さず、たゞ年功とか年甲斐とかに頼つている者の多いのを非難する声が強まつてきた。それを「先生」「大家」の側では異端者としてひんしゅくした。

われわれの柳壇では、俳壇ほどの枠にとじこめられることはないのだが、それでも幾分かは吟社々々の色というか匂いというか、そういうものはある。同人となり、投句者となるためには――自身の好きずきの主宰者の雑誌をえらぶことで、その主宰雑誌の枠に当てはまろうとするのは是非もないのである。

江口氏が「主宰と作風が異れば破門である。結社に三年も所属していれば大抵の人間が骨抜きになる。そういうのが実情である。」というようなことはぼくたちの柳壇ではまずないといつていゝだろう。もしそんなことがあれば、まことに奇怪なことである。

ぼくはかねがね考えていたことだが、ある川柳人が自己の作品―その作品量が一カ月どの位になるものか、その人その人で違うであろうが、まず二十句か三十句としてみて、それを主宰誌の規定にしたがつてある定数を投句するのであるが、そのうち本誌の〝近作柳樽〟では巻頭が七句、以下五句が八、九名、以下四句、三句、二句、一句と列んでいる。ある主宰誌への投句資格というものは、本誌では「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募るとあるので、別段資格はうんぬんされていないけれども、半ケ年なり一ケ年分の誌代を払込んでいるのが常識だとせねばなるまい。なかには柳友から借覧して投句するのもあろうし、寄贈された柳人が投句することもあるかもしれない。

だいたい〝柳誌を購読して投句する〟というのが、その柳誌経営上の基盤をなすもので〝大切なお客さま〟である筈だ。その人たち

には江口氏のような結社無用論など凡そ無用であり風馬牛であろう。

楽しみに句を作つて、楽しみに〝趣味〟として投句して一句でも三句でも誌上に発表されればいゝのである。〝庶民のうたごえ〟はそれ自身を生かして行く上にいろいろある摩擦や矛盾を調整して行く潤活油となるものであつて大いにいみのあるものだ。

こんどの江口氏の結社廃止論にたいしても諸方からの反対意見の中に「雑誌の詠草欄に見られるつつましくみずみずしい歌ごえは、もし結社雑誌という手近な発表機関がなければ、多くは歌われることなくしておわるものであることを、君は知つているか」と詰問しているし、「短歌、俳句によつては大抵の人が生計の資を得ることが出来ないので、だれに遠慮も気がねもなく、信じたことを好きなようにうたいうる」と強調している人もある。

世間のものごとというもの、人間の五官にかんするものでないものはないが、人間のそれらの慾求に企業性を与えることで一つの形ができ上り、一つの仕事の経営というものが整つてゆくわけだが、ぼくは、一般の作句行動をまとめて企業化して行く「大川柳誌」の存在は当然可能性あるものだと考える。江口氏のいうような反民主的であるとか、ガンであるとかいうような気負い立つたことは、企業化された「結社」には無用のものであろう。

もともと川柳が企業として成り立つようになつたのは、大阪の柳壇からで、東京では今日もなお完全に企業化されたとはおもえないのだし、まして地方々々の柳誌にとつては企業化などということは夢でしかないであろう。

川柳を企業化した功績は、ぼくの知るかぎりでは本誌『川柳雑誌』であろうと考える。もう一誌、本誌のライバルと一般には考えられている某誌が、その組織を「株式」にしているという話を、その雑誌の有力メンバーからきいたことがあるが、ともかくその他には、企業化された柳誌はないのである。

本誌が、いま「読者倍加運動」として、広く呼びかけているのも当然な帰結であるが、これは「大阪ならでは！」の感を深くするものである。東京ないし他府県で、やつてみても、恐らく成績はあがらないであろう。

せつかく川柳が企業化され、それを受け容れる体制が整えられてきた現在、ぼくたち部外者の望むことは、たゞ単に投句者の投句雑誌におわらせたくないということである。それにはどうしたらいゝか。

東京では最近、国文系の一般雑誌が、川柳特輯号を出して好評を得たり、岩波文庫が「柳樽」を校定して権威あるものとし、某博士によつて川柳語彙が物されたら、ぼくらごとき末輩にまでジャーナリストが呼びかけてくれる現状になつたのであるから、川柳の企業化という、われわれのかつての夢も一歩々々実現しているのである。

旧来――山雨楼氏の、うまずたゆまざる努力によつて確証されている川柳文献の数はおびたゞしいものがある。下地は一日にして出来上つたものではないので、ソロバンに合わない多年の仕事の累積が「今日」をもたらしたのである。

一部出版社が、その企画の一部に歌壇や俳壇を取上げての企業化雑誌というものが、どのくらいの売れ行きをもつているのか、おそらく現在のそれではソロバンがとれていることは考えられないのである。コストにもよろうが大資本の一部に歌壇、俳壇が占めているバランスに比べて、川柳はまだ一般出版社が取り上げる線にまでは行つていない。こういう現状のとき、本誌「川柳雑誌」がどこまで伸びて行くか、それは大阪だけのもんだいではないとおもう。少くとも大阪の川柳家は本社のためばかりでなく、川柳界全般の地盤拡張の点からも、倍加運動には協力してもらいたいのである。

BK放送川柳

課題「男の子」

麻生路郎選

佳作

男の子二尺飛ばして下駄を脱ぎ　岡山市　服部十九平
夕食へ一人欠けてる男の子　洲本市　中所　一夫
汽車に乗ることがうれしい男の子　大阪市　木口　賀峰
男の子もうグローブが欲しくなり　米子市　勝田　正郎
ぬかるみをよつて歩くも男の子　奈良市　絹下　南天
孫のよな男の子をば頼りにし　大阪府　深見雅樂太
男の子こんな降りでも迎えに来　大阪府　横倉漫多朗
うかつには小言も云えぬ男の子　大阪市　米村　壯一
また屋根で声がしている男の子　貝塚市　津田　千舟
共学のおもちゃズボンを寝押しする　日南市　井上万壽男
男の子どこえでも釘うちたがり　神戸市　松尾　天信
押売の横へちよこんと男の子　大阪市　金泉　万樂
色街に生れて邪魔な男の子　大阪府　宮尾みのる
まち〳〵な意見男の子だけが出し　京都市　藤井　幼二
男の子湯ぶねに波を立てたがり　大阪市　正本　水客

入賞第一席

男の子家業を継がぬ方へ伸び　大阪市　延東　智代

入賞第二席

靴磨く少年生きる顔を持ち　大阪府　則武　朗郎

入賞第三席

ガールフレンドだよと平気な男の子　松阪市　萬濃　修

アサヒビールは
あなたのビールです
朝日麦酒株式会社

閑谷学校見学記

北川春巣

昨日はあれ程快晴だつたのが、今朝は空全体がどんよりとして花曇り。然しお天気は今日一日は何とかもてるだろう。との博士の診断。

時は昭和二十九年四月二十五日。場所は岡山県吉永町、路郎先生の第四句碑のある大森娯句楽氏邸。昨二十四日夜は川雑備前支部創立六周年兼句碑建設三周年の記念川柳大会があり、会は盛会の極をつくして深夜二時迄続いた。今朝は、岡山市から特別出席された服部十九平氏が帰岡されるので、八時起床。朝食に又一献頂いて、十九平氏が出発された後、大阪から参加の我々(緑雨、淡舟両氏と私)は、娯句楽氏の案内で閑谷学校を見学することになつていた。

閑谷学校と云うのは、私も初めて聞いた名前であつたが、これは寛文十年(一六七〇年)、時の岡山藩士池田光政が、津田永忠に命じて建てさせたもので、世界最古の公立学校である。一寸聞くと如何にも封建臭が感ぜられるが、よく聞いて見ると左に非ず、武士の教育ではなく農民の教育に資するもので、中堅農民の養成をモットーとし、孔子を拝して朱子学を教えるのであるが、岡山藩のみならず、他の藩の子弟にも入学資格を与えて、教育の機会均等を打出している。昔の神社仏閣に御料田があつた如く、学田学林が付与されて、自立的に経営出来るよう配慮されていた。聞いたゞけで中々面白そうだし、現に孔子像や講堂は国宝に指定されており、又現在は県立和気高等学校の閑谷校舎として分校になつている由であつた。私達は疲れてはいるが、是非拝観したいと申出た。

娯句楽氏邸の前には山陽本線が東西に走つているが、それに並行して国道が走り、国道を南へ横切ると、もう摺鉢をふせたような山が立塞がつている。その山を越した所が閑谷で、徒歩約四十分だとのこと。一行は四人分の弁当と一升壜とを両手に持つた娯句楽氏を先頭に、勇躍出発した。

山は全山若葉の緑で、「目に青葉」の句の「青葉」を「若葉」に置きかえたと思えばよい。登るに従い背にしつとりとにじむ汗が快い。「ほとゝぎす」は五月に入れば聞かれるそうだが、今は鶯の声がしきりだ。

鶯の聲をほめ〳〵汗を拭き　春巣

還来の客へ鶯谷渡り　淡舟

道は三尺に足らぬ狭い谷川で、水の涸れた時には道となるのだ。そろ〳〵と登つて、所々で立止つて汗を拭く。富士山に登る心構えなどを語り語り行く。娯句楽氏が、荷物の一升壜を軽くしたいらしく、「飲みませんか、」としきりに誘つて下さるが、今朝飲んだのがまだ残つていて食指が動かぬ。緑雨氏、淡舟氏は酒には一顧をも与えられぬ。娯句楽氏の重い荷物が続く。別の登り口から登つて来られた。東岸子、正州両氏と途中で出会つて一行は六人となり、荷物は此の若い人々に引継がれる。私の軽い鞄まで持つてやろうとのことで、私も手ぶらになる。このへんから、足弱の故をもつて、私が先頭に立たされる。道は一本道だから間違えつこはない。

足弱にされて嬉しく先に立ち　春巣

面白いことに、こんな細い道でも峠に近くなると、「七曲り」など名前がついている。峠で十分間の小休止。今度は下り坂で、淡舟氏が先頭。小粒の雨がポツリと私の鼻の頭を打つたが、運動のため頬がほてつているので、却て快い。お天気博士は誤診をしたわけだ。

間もなく山をはなれて、道も広くなり、平地に出た。古風な寺院風の建物の屋根が見える。矢張り学校の建物の一部で、屋根の瓦の褐色なのが目立つ。名産の伊部焼

金婚式

福田丁路

昭和二十九年二月十一日、風呂から出てくつろいでいると、妻が笑いながら話しかけて来た。

「今日は何の日かご存じ?」「元の紀元節だよ」「まだ外に……」「結婚記念日だネ」「その外に……」「解らんネ……」「結婚して二十五年目、銀婚式なのよ」

私は唸つて仕舞つた。妻も台所で今思い出したと云う。成る程数えて見ると正しく二十五年になる。結婚当座は私にも人並に色々な夢があつたのであるが、何一つとして思う事ならずで今日に及んでいる。趣味の方面にしても同様であつて、皆んな中途半端なものであるが、たつた一つだけ例外として川柳がある。

私が川柳に手を染めたのは結婚生活に入つた京都時代であるから、二十五年の柳歴となり、此の道では古顔に属するものと思う。これは川柳なるがゆえである。

私の最初の句は、

負けさした金は孫への土産なり

であり、川柳雑誌に発表された時は鬼の首でも取つた様に胸を踊らせたものである。この様に永い柳歴にもかゝわらず、その後一向に進歩も発展もなく、人様の前に出せる様なものは一つとして見当ら

とか。雨は小粒乍らしきりに降る。

学校へ行く前に先ず道を左へ取つて、頼山陽がとゞまつて詩想を練つたと云う「黄葉亭」を見学した。黄葉亭は、

小倉山しぐるゝ頃の朝な朝
昨日はうすき四方の黄葉ば
（続後撰和歌集　藤原定家作）

の歌から命名したとのことで、小さな川のほとりに建つた八畳程の一室のチンである。室内にはイロリも切つてあり、三方は廻り廊下になつている。今は玄関の前に藤が真つ盛りだつた。

山陽を慕め顔に藤が咲き　春巣

黄葉亭覗けば穴蜂顔へ来る　淡舟

初めの道へ引返し、いよ／＼閑谷学校だ。学校の敷地は一万坪に余り、土地はほゞ矩形を呈している。南は道路に面し、後は緩かな勾配で上りになつており、全地域を石の塀が囲んでいる。石塀は高さ約一間、巾も底部では約一間、云わば小規模な万里の長城で、山腹を匍い溪流に沿い、長さ約七町に及ぶ。約二百五十年前の建造物である。石塀の囲いの中で最も東の端が椿谷と呼ばれ、椿の並木だ。その北の端の小高い所に、池田光政の遺髪・遺爪を納めた塚がある。赤い椿の花がまだ少々、梢に残つていた。水谷鮎美氏に見せたかつた。その西隣が閑谷神社で、北の小高い所に本殿があり、池田光政を祭つてある。今日は運よくお祭り日で（お祭りは四月と十月の二十五日）神官の出入も激しく、又ラジオ山陽からも録音班が来ていた。我々も何かの因縁と話し合つた。その西隣、即ち東西の略々中央に孔子廟があり、（大成殿と云う）中に国宝の孔子像が安置されている。今日の見学の主目的物であるが、後で説明をしてもらうことになつているので像は見ずに素通りした。その西が講堂である。桁行七間、梁間六間の木造建築であるが、材料には欅・檜・楠等の高級品を使つてあり、床板は鏡の如く光つている。一見剣道の道場を思わせるが、学生が農民の子弟だつたのだから、剣道などする筈はない。こゝに正座して精神講話に聴き入る少年達の姿が目に浮ぶ。天井は楠で、蜘蛛一匹住んでいない。この講堂も最近国宝に指定された由である。

元禄の頃より磨きのかけた艶　淡舟

以上挙げた各建物には、それ〴〵石塀から門があり、石畳の道がついている。大成殿の門が最大で、「鶴鳴門」と呼ばれている。開閉に際して鶴の鳴き声を出すからとも云い、又「鶴鳴干九皐」（詩経）から取つたとも云われる。現在は調子悪く鶴の声を立てぬ由。

その西が文庫で、火除山に続いている。火除山は、全地域を七分三分に見る所にあり、南北に連つていて、文字通り火災予防のための小丘で、全丘奈良の若草山を思わせる芝に被われている。山の地下にも物品を納れておく部屋があるとのことで、文庫から通じている。中の品物は、恐らく原爆にも安全であろう。火除山に登つて見渡せば、丁度若草山から奈良の街を見下ろしたように、今迄見て来た諸建物が手に取る如く見える。火除山の更に西には、現在使用している学校の校舎があり、これは普通の学校の校舎と異る所はないが、これももとは手習場に使つていたものだと云う。

火除山の上に来た時、丁度十二時になつたので、いよ／＼待望の昼食となる。酒を酌み交しながらの新緑の眺めは一層美しい。暫く止んでいた雨が、再び降り出したので、娯句楽氏の肝入りで、今日祭典のため開けてある閑谷神社の社務所へ宴席を移すことになつた。一同は大喜びだつた。酒は備前の美酒、肴は娯句楽氏夫人の心のこもつた料理。飲む程に食う程に、句会をもう一度持ちたい希望にさえかられたが、説明を頼んであつた人が来て下さつたので、その熱望も水泡となつた。

説明は鶴鳴門からはじまつて、孔子廟・講堂に及んだ。孔子像は金色に輝いているが、実は青銅の上に金メッキしてある由。

佛壇は凡夫の拜む色でぬり　路郎

を思い出した。元禄十四年の作、本物の金と間違つてか、よく盗難に遭つたそうだが、その度に運よく取返すことが出来て、現在見る通りだとのこと。但し終戦直後に盗まれた際には、孔子が頭上に冠つていた斉冠が遂に返らなかつたそうである。

孔子像齊冠がなく淋しまれ　娯句楽

講堂の説明を聞いた後、藩公が臨学された際の居間をも見学した。六畳敷程の狭い質素な部屋で、床の間も置床。次の間に浴室・納戸等がある。興味があつたのは、鼠が暴れるのを防ぐため、居間の天井裏には栗のイガを敷きつめてある由で、又天井は板張りでなくて柳の木を張りつめてあつた。川柳の「柳」と、何か通じる所があるような気がした。

汽車の時間もあることなので、説明者に礼を述べて、石塀の一番西の門から外に出た。一歩門を出ると、そこはもう俗塵の渦巻く国道で、俗人共が大勢駅へ行くバスを待つていた。我々も今迄数時間の仙境を脱して、俗人の仲間入りをしたのであつた。その瞬間、今迄少しも気にならなかつた雨が、冷たく頬に感じられた。

俗人の頬へうるさい春の雨　春巣

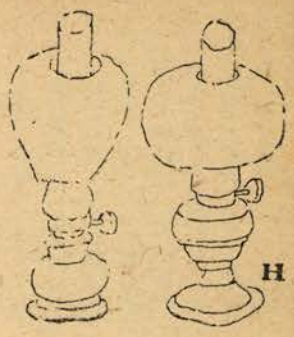
ず慚愧に堪えない次第である。

路郎先生の川柳生活は五十年の永きに亙り、その記念事業として昨秋柳壇の世紀的句集「旅人」が上梓なり、之が記念の会が二月十七日阪急特別食堂に於て盛大に開催され、私も参会の光栄に浴し、そして先生の川柳への迸る情熱のお言葉に接し感激の涙に咽んだ次第であるが、之から思えば私の川柳生活はその半分である。之を人生に譬えるなれば二十五才の青春時代と云う事になる。

先生と同様川柳生活五十年に達するにはまだ二十五年の歳月がある。私はまだこの期間は充分に生きられる自信があるから勉強の時間に不足はない。今後もより以上の先生のよろしき御指導を得て、励み努めて後世までも残る「いのちある句」を一句でも創り、そして目出度く私も川柳生活五十年記

山銀の瓶

大阪市大淀区長柄
西通一丁目四四
山銀硝子株式会社
電話堀川四四七番



—川柳時評（三）—

脱皮

藤本滿年

少し旧聞に属するが、評論家阿部真之助氏が三月十四日号のサンデー毎日に「油断ならぬウソ流行」なる見出しで、川柳は以前のように盛んではないようであるという書き出しから、一つの川柳論を行つている。阿部氏は

「寄贈をうけた或る川柳の雑誌をみると、口をきわめて川柳が文芸であることを力説していた。川柳が文芸になつてからはやらなくなつたのか、はやらなくなつたから文芸であることを力説せざるを得なくなつたのか、そのいずれであろうかなどとも思つた。」といつている。川柳ははやつてもはやらなくても、昔から文芸であつて、その盛衰によつて文芸説の出たものでないことは、いまさらいうまでもないことで、阿部氏は川柳によほど縁の薄い人のように受けとれる。このように縁の薄い人に川柳の雑誌を寄贈した川柳社はどこのなんという発行社か知らないが、迂闊千万な話といわねばならない。

さらに阿部氏は

「私の思い違いかも知れないが、もともと川柳は世の中や人間の中にある矛盾性を風刺する目的で、俳句の短詩形を借用したものらしい。文芸であるよりは、政治、社会の評論を本来の目的としたものらしい。」ともいつている。

それは阿部氏の思い違いぐらいではなく、根本的に間違つているようである。川柳は世の中や人間の中にある矛盾性を風刺する目的ではなく、合理性を風刺しようが、また風刺しなくてはならぬわけでもない。川柳には確か風刺句は多い。川柳の三要素として、穿ち、軽み、おかし味ということが重んぜられ、穿ちが風刺を意味することは理解出来るが、三要素は必ずしも、俳句の季題と同じような約束ではなく、三要素を含んだものが、良い句になりやすいというにすぎない。俳句の短詩形を借用したらしいというにいたつては、ます〳〵笑止の至りといわねばならない。

俳句は諧謔の発句を切り放し、正岡子規が俳句と銘名したもので、川柳は諧謔の前句附が独立したもので、十七音字の意味を解するという点では、むしろ川柳の方が俳句より先輩であるともいえないことはない。先輩、後輩論は別問題として、俳句と川柳は諧謔が生んだ双生児であつて、川柳は俳句の短詩形を借りたものでないことは、少くとも、俳句や川柳を少しでもかじつたものは、殆んど知らないものはないであろう。

さらに阿部氏はつゞけて

「徳川時代や戦時中のように言論の自由のない時代には、権力の弾圧から逃避するため、詩形借りに川柳も、世人から愛好される理由があつたところが思うことを、思うがまゝに発表することができる今日では、必ずしも十七字に限定された不自由たらしい形において、胸のウップンを吐き出さなければならないということはない。」

という意味のことを述べている。

しかし、ここでも阿部氏は根本的な間違いを犯している。川柳は決して、胸のウップンを吐き出すため、すなわち、世の中を風刺するだけの目的で詩形を借りているものではない。阿部氏の論法を借りていえば、花鳥風詠の俳句にしても、もののあわれを詠む短歌にしても、不自由たらしい形において、十七字や三十一字で表現せねばならぬものではないということになるのである。

阿部氏は川柳とは社会時評的なもの、時事川柳を川柳の主流として考えているようである。その証拠には、この文章の後半で、新聞や雑誌の「うそクラブ」の復活を喜び、川柳よりも新聞の短評やうそクラブを礼讃しているのである。川柳を社会時評と同じ性格のものとみるのは阿部氏の甚だしい独断で、おそらく大多数の川柳人は、社会時評的な考えで川柳を創つているものはあるまい。サンデー毎日の募集している時事川柳に投句している人たちでさえ、時事川柳を川柳の正道と考えているものはあるまいと想像される。多くの川柳人たちは作句のレッスンとして時事川柳を作つているにすぎないのである。殆んど大部分の川柳人は生活詩を創ることを念願し、川柳によつて生活を明朗にしたいと希つているにちがいない。川柳が詩であるかどうかについては、川柳非詩論者もあり、必らずしも意見は一致していないが、桑原武夫博士のように俳句の第二芸術論者もあり、川柳人たちは川柳に対する批判は大いに歓迎したいが、余りにも川柳に縁遠い人が川柳を知らずして独断を前提としての議論は非常に迷惑するのである。しかも阿部氏の如き高名な評論家で、多くのファンをもつ人だ

一句、弐万円也

若本多久志

忘れもしない四月十一日、平野町の銀行から預金を弐万円引出して、通帖の間に挟み、内ポケットへ入れて御堂筋のバスの停留所へ急ぐうち、二三日前、淀川支部で課された五月句会の兼題「若草」の句想が浮んできた。

「よし、バスの中でひと練り！」

と満員にもまれ乍ら、冥想、一時。梅新で下車する途端にやつと出来上つたのが、

若草を馬はむざんに喰つてゆき。の迷句で、実にいゝ気分だつた。誰しも味わう醍醐味だが「むざん」と言う表現に、いささか自己満足し乍ら、社に帰つて、フト内ポケットへ手をやると

「アッ」と思わず声をあげた。

敵乍らあつぱれな掏られ方は、それこそ実にむざんな気持だ。

然し考えて見ると、チボは二万円をものにし、私は好きな一句を、ものにした訳だ。

高い一句ではあつたが、あれは、あのチボが改心前の最後の仕事で、二万円で何か堅儀の商売に就く資本の足しにでも、してくれるんだつたらよいがなあーと、祈念の会を催すと共に金婚の式典を挙げ、そして静かに人生へのピリオドを打ちたいと思つている。

けに私たちは黙つて読み過せないのである。殊に阿部氏はこの文章の書き出しに「以前のように盛んではない」といつているが、以前とはいつのことかよくわからない。けれども、川柳はじまつて以来今日ほど多数の川柳人のいることは前例がない。しかも今後ますます川柳人は増加こそすれ、衰えることのないのは、少しでも名の知れた川柳関係の雑誌を愛読すればたちまち了解のできることであろう。

たゞ私たち川柳人側にも多少の反省は必要でたしかに東京においては、お世辞にも川柳は盛んであるとはいえない。少くとも短歌、俳句に比して同好者の少いことは事実である。東京の空気を吸う阿部氏が、川柳が盛んでないとみるのも、決して無理ではないのであつて、関西における隆盛を知らない阿部氏の調査不充分を遺憾とするわけなのである。なぜ東京では川柳が盛んにならないか、短時日の視察ではその根源をつかみにくいが、原因の一つとして現代川柳作家にインテリゼンスが足りない。そのため社会の指導層の中に川柳が侵入して地歩を占めることができない。いつまでも、江戸時代川柳の現代語版では満足されない時期が来ている。川柳も脱皮せねばなるまい。

新川柳考察

大森風來子

川柳家

川柳作家が一句をものにするということは、いわばそこに一つの新しい世界を創作することである。したがつてその作品は神のそれの如く無偏であり得ない。そこには、作家の小さな、人間の煩悶があらわれる。そのなやみは作家の小さい主観により支配される。作家は自分の創つたその世界の中で、自分の生活をより豊かに楽しいものにしようと努力する。その世界の独創は川柳家の自由である。しかし作家が現実に住む社会は必ずしも自由でないことを忘れてはならない。

描写と技巧

川柳は描写に始まる。描写の拙劣な作品は文芸としての価値はない。描写によつて人の深さも、真実も語られる。描写は作品に於けるリズムの統一であり、生動する気韻である。それに対して、技巧は局部的に動く聰明さである。技巧はなくとも描写の効果は無いとはいえないが、技巧があれば作品は一層輝きとよろこびを増す。

経験はすべて連続している。分裂したり孤立したものではない。ことさらに美しく見せようとすれば、かえつて統一を缺ぎ、経験は分裂をきたして見にくいものとなつてしまう。生命の動きは統一の流れであり、統一の創造である。川柳家が身をその中に没すれば、おのずから真と美をつかみ、名吟を吐露することに成功するだろう。

テーマ

川柳は享楽物ではない。人生の見方である。これを創るのも真剣であれば、これを詠むものも亦真剣である。その作品の中に於いて大いに苦しみ、大いに考えるところがなくてはならない。作家が作品の中で人生の問題を考察した時、そこに問題を解決するなんらかの新しい見方、又は目標が掲げられなければならない。

しかしてそのテーマは明らかに解かれるよりは、むしろ遠く掲げられたものの方がよりすぐれている。解くということは生活としては必ずしも深くはない。いかにしても解けないものの方がはるかに深く且つ真実の人生であり社会である筈だ。言葉を換えれば、一見して作家の意図がわかるようなテーマでは人の心を打つ芸術であるとはいえまい。しかもそうした安易な作品が現今の柳壇には多いのである。

第二に、川柳のテーマは露骨にあらわれるものよりも深く底に通ずるものであつてほしい。批判精神に満ちたユーモア諷刺文学であつてみれば、この弊を犯すものが又おびたゞしいのである。表面にあらわれた部分はほんの僅かでも、汲めども尽きぬ深さが藏されるべきである。

品格

心すべきことは川柳の品位であり、気品である。しかも淡々として語法は平易でなければならない。韻きがあり呼吸があり、強弱があり、しかして主題は一つであつて主を取つて動かぬものでなければならない。その思想は時代と共に移り、純粋であり正直であり、作者の品格の統一がゆかしく感じられるものでなければならない。（四月十一日ラジオ山陽で放送の一部）

つてやる様な気持になつた。

「神よ神、俺の気持をつげてくれ」

麻生路郎選評　山陽図書KK版

山陽川柳

A5版　二三七頁
定価　二〇〇円
〒　二四円

一一八九人作家集　総句数二二四七句

大多数の作家は新聞柳壇から生れた。本書は山陽新聞柳壇の作家の佳吟集である。選評は本誌の主幹麻生路郎先生である。本書を熟読することによつて初心者と雖新川柳の良き作家の列に入ることが出来るように編纂されている。一読を請う。

取次御注文は　川柳雑誌社

大阪市住吉区区内方代西五丁目二五
振替口座　大阪　七五〇五〇

武田薬品

熟眠できますか？

不眠症・神経性不眠症・神経衰弱・ヒステリーの方に

カルモチン錠

30錠（80円）・100錠（200円）

人間横丁（XIV）

東野大八

ハリボテ政治

爪に火を点して蓄めたなけなしの金は保全会がはいありがと。困つた挙句、いつそのこと、と考える耳もとで、悪いことはやりなさい私が引うけた、と犬養法相が親切にいつてくれる。それを耳にして天日を仰げば、そとから妙なものが降つてきた。人間がアナ埋めのマグロでなくてよかつたわい、とほつと心をとり直せば日本を離れてどこかの国に行きたくなつた。するとそれをまつていたように、保安隊はいかゞ、衣食にこと缺かず海外にだつていけますぜ、と木村クンが官のごとくサヽやく。成程そのテもあつたと考えたら、そのテはおれに一本しかついてないよせやい、片輪の兵隊つてあるかよ、と苦笑したらいつのまにか漫画の泰三クンが立つていて〝当節は万事片手落の世の中。君こそまさに有資格者だ〟と立派にオチをつけてくれた。行届いたことである。頭の中の夢までが…。とにかくまさに乱世である。汚職は汚職を生み、疑獄は疑獄をよんで尽きるところがない。底知れぬ腐濁の泥沼。政権、利権私慾にハラワタまで爛れきつた醜塊のるいるいたる上を、冥符のごとき札束の紙片が雨とふりそゝぐ。金、酒女に五慾をみたし人間の魂を喪失したこの餓鬼群の地獄絵を、一体誰が裁くというのか。見給え、美しき緑の五月というのに……。

さて某日、面識ある一人物から鄭重な招きの電話が私にかゝつてきた。赴くと形改めて相手はいう。

「世情の現実にあきたらず、ついに私は県会出馬を決意した。ついては一体何を公約にして出たら効能があるか、一つご商売柄のご意見でお教え願いたい」

「何を他人行儀に……」

と私は頭からその話にとり合わず笑殺してしまつたが、一膝どころか二膝三膝もすゝみよつて相手は、力をこめて殊のほか真剣に、切出しの口上をくり返す。私もついに笑つてはおれなくなつて「そりゃ、本当ですか」

と真顔になつた。小学校を五年で終ると炭焼き人夫に出され、郵便配達人となり、運送会社の若いもんになつた彼は、戦後その社の労組すいせんによる重役に出世した。冬でもヘソを出し彼に不相応な皮イスの上で、ひねもすあぐらをかき、退屈そうにあくびばかりしている彼は、四十四、五のありあまつた精力を退屈なまゝ、ついに県議出馬という好ゲームを思いたつたのだ。私にはそうとしか受とれない相手である。「やめなさい」と私はいゝたかつた、が結局熱のある相手の出方に妥協して、左様なれば私の感じている、たゞ単なる一個人の考えだけなら申上げましようといつた。かくて私は無教養だが苦労人の機微を生かし、あくまで人間の気性にたつたもので進む理窟は一切ぬき。そうだあなたの生地のまゝが一番よい。炭はどうして出来るか一つでも結構。これなら貴方以外に知る人もなかろうじやないか、といつた。

こうして彼は出馬し、当選した。オドロキに属する事実であつた。私の意見をとり入れそれを実行にうつしていつたのかどうか、私はそれを知らない。あんな男がネエ、たゞそうあきれて首をふるばかりであつた。ところがである。金色の県会バッチを胸間につけた彼は、程なく知事側近となり建設委員長となり果ては県会副議長にまでのし上つた。この間わずか二年。この貫禄におよんだ自負は最近、衆院出馬にまでおよんでいるときく。

かくてこのほどあうや久し私は偶然この男と汽車の中で同席した。そのかみのソボクな、私の話に傾聴した彼の稚気はもう、その肥つた身体のどこにもない。自信満々、何ものかへの斗志にたえずかりたてられている人間のもつ一種なまぐさいあのいやな臭気が、この男からも立のぼつていた。彼はいう。

「政治とはね、ハリボテの舞台の岩みたいなもんですよ。幕があくと見物衆は、このハリボテを山の一角とみ、石の塊りとみる、しかし役者にとつては木のワクに紙が張つた舞台装置の一つにすぎんのですよ、だが立役者はこれにぶつかつてコブを作るしぐさ、つまり演出をやることを十分に心得てるんですよ。政治つてあんたそんなもんです、面白いもんですよ」そういつて彼は、ケラ〳〵と七面鳥のように笑うのである。私はムッとなつて相手をにらみつけたが、彼はてもなくそれを黙殺して、もう二度と政治の話にはふれなかつた。

余談だが私の尊敬すべき県の一部長は、彼のためにその職を追われた。無官となつた彼は、ある夜私とともに中華そばをすゝりながら、こう寒々と述懐した。

「政治とは権力ですよ、実質でなくてカラクリが一切です。権力のある政党が党略のため、不要不党の道をつくり橋をかけ畑をつぶす、そこには大衆のための利益や声は何一つきゝ入れられてはいなんだ。真に県民のため大衆のために必要なものがそこにあるのに、彼らはあえてそれには一顧も与えない。民益有先の本義さえ確立すれば、県費はどこの県だつてみんな黒字ですよ」

私は政治の盲点の一つをダメ押しされた思いで暗然とたゞ耳を傾けていた。政治は愚劣な人間ほど、そこに生彩をおびるものだ、そんな風に私は今も考えたりしている。

日本ステートフエア

全國川柳大會表彰式

新緑のあやめ池遊園地野外劇場で

主催　川柳雑誌社
後援　朝日新聞社

朝日新聞創刊七十五周年記念事業として第二回日本ステート・フエアが近鉄沿線あやめ池遊園地で開催されているので、わが社も第一回に引続きこの壮挙に協賛し、今回は従来と形式を異にし、全国川柳家並びに大衆の皆様から弘く優秀作品を募集、麻生路郎主幹の厳選によつて誌上大会を行うこととした。募集期間の非常に短かかつたにもかかわらず多数の応募があつたので、五月十五日午後二時三十分から日本ステート・フエア会場内の野外劇場で朝日新聞社、近畿日本鉄道株式会社社員参席の下に、入選句の発表並びに入賞者の表彰式を行つた。わが社からは路郎主幹をはじめ土井文蝶、友淵貴山、木村水堂、永田都詩子氏等が大会委員として出席、友淵貴山氏の挨拶にはじまり、麻生路郎主幹は病後未だ日の浅いにもかかわらず、元気一パイの声で入賞第一席の句からマイクを通じて入賞二十一句の発表をされ、佳吟を読み上げる毎に、カンタンの声が上つた。次いで佳吟三十句は貴山氏が主幹の疲労をけねんし、代つて披講、終つて入賞者の表彰を行い賞状並に副賞として賞金を贈つた。閉会後温泉食堂で役員関係者等は晩餐を共にして、この佳き日の幕を閉じた。

入賞句並びに入選句は次の通り。

第一席　賞状　武部　香林
副賞三千円

子供汽車親はビールを抜いて待ち

第二席　賞状　正本　水客
副賞千円

アヤメアヤオてれくさそうに少し吠え　菊沢小松園
スリラーブリッジ思わぬ人に手を取られ　延原句沙彌

第三席　賞五百円
根太張れば既舎結構暮らされる　永田都詩子
ステート・フエア豆科学者の顔も見え　河楊　梵鐘
二度目には村長青年たちを伴れ　酒井ひか平

第四席　賞三百円
ステート・フエアで奈良行きを棒にふり　北川　春巣
ステート・フエア恋打ち明けるとこがなし　中塚　夢生
マヽも今日ステート・フエアの新知識　柿本　古竹
ステート・フエア農業館は素通りし　槁本　雅巣
アイランドママは不安な顔で待ち　水谷　竹荘
あやめ池疲れを知らぬ子に疲れ　西森　花村
子供列車しばし別れのように立ち　井下　晴芳
ステート・フエア恋せよと云ふ道もあり　武部　若菜
農機具へお父さんの眼がへばりつき　野村　味平
もみくたにされても猿へ動かない　友淵　貴山
乳牛としてふくらんだ乳あらわ　木村　水堂
今日は子の云いなりになるあやめ池　丸尾　潮花
ステート・フエアお伽の国へ来たような　山本　葉光
案内図見残した所探し合い　不二田一三夫
停電がなくなる話ダムを指し　佳作
素人のカメラ煩さく海女を追い　千舟
子の方が先輩顔の飛行塔　寿利庵
ステート・フエア面白かった綴方　幸子
ステート・フエア象も参加の芸を見せ　亀一
ロケットは月え行く気の顔を乗せ　照子
子ぼんのう妻をのこして飛行塔　千潮
野外劇鎧をつけたアルバイト　多久志
水が火に機械米を増やす況　秋香
ノートするよい子に親は待たされる　日本村
冷汗を拭き拭きほめる乗心地　悦子
かあさんもお乗りと坊ヤアイランド　朝翁
あやめ池子連れがみんな若返り　へとち
のど自慢ひざに寝た子をもてあまし　省三
飛行塔乗つてみたくて子を誘い　満秋
来た日からもう馴れ切つている鳶鳥　賀峰
いゝパパとパパさが産業館に立ち　紫香
童心にかえるシュートの水しぶき　栗
アナウンス北海道の客を呼び　鮎美
ステート・フエアからも科学を持ち帰り　十悟
嬉しさの悲鳴がコニーアイランド　日本村
ステート・フエア日の丸弁当似合うここ　貴山
ローローブレーン愛人の顔みて居れず　水客
春の列メタセコイヤをくぐり抜け　水客
アベックへねじれ見せる繩綿機　句沙彌
日程にここ遊覧のよいところ　味平
池の数飛行塔から数えさせ　香林
子を乗せたウオターシュートへ眼をつむり　潮花
飛行機も汽車もとパパが乗りたがり　ひか平
見残して見残してステートフエアを出る　日本村
漫才の笑わす声が風に乗り　都詩子

○

最後に本大会挙行に当りいろ〳〵御高配をたまわつた朝日新聞社並びに近畿日本鉄道株式会社にあつく御礼を申上げる。

近作柳樽

路郎選

父も娘もカメラを向ける花吹雪　吹田市　梶川　蘇堂
相手にも言い分がある橋懸り　同
相舞の裾後見の手が延びる　同
渡月橋此処から三味の似合う街　同
大陸の声が呼び合う夜のホーム　同
停電へ夫婦あわてぬとしになり　同
墨すつて恙なき日の祝いごと　東京都　夷石　鼓風
金バッジ默つて白石を先にとり　同
造形美などと針金活けてあり　同
喧嘩腰訳の分らぬ朝鮮語　同
小商人鉛筆甜める癖があり　同
数学のうまい男で無精髭　同
恥と云うものを忘れた議員章　今治市　長野　文庫
常連の彌次を舞台の目が押え　同
軽く見て安せんべいと番茶が出　同
街録へ喋り過ぎてる反対派　同
青い目の客にまごつく骨董屋　同
だあまつて一本つける妻に謝し　唐津市　新岡回天子
退へ春の若芽がみつめられ　同
芸が身を助け男を養えり　同
進駐軍釣り上げる様にして踊り　同
ほろ苦い思い出アルバムそっと閉じ　同
好かん人どすえと舞妓ガムを捨て　大和高田市　戸田　悅子
一万円あつさりと買う顔を見る　同
彼を待つ橋で眞知子をふと思い　同
儲けないミシン掃除がゆきとどき　同
コップ酒背廣へ遠慮なくこぼし　兵庫縣　酒井ひか平
満汐を彼氏におんぶされて逃げ　同
このままで死にたい恋の岩に立ち　同

王地山稲荷春祭

花笠のお稚兒キャラメルねぶつて居　同
風呂で見る女画像の様に立ち　岡山縣　松島　不在
エレベーター男一人を虜にし　同
聽診器処女の乳房へ押して見る　同
世話になるベッド小島の世話をやき　同
新婚の気分こわしにきた税吏　大和高田市　中谷川太郎
三輪山へくれば蛇まで神祕めき　同
蛇がはう如く山から見た列車　同
新妻へいつしか僕が俺となり　同
奥様も御安心です保險金　滋賀縣　土守トン坊
子供にも意地があるのか受取らず　同
すばらしい仕事は山で樹を倒し　同
役場また呑んで居るらし灯がとも　同
看護婦に活けさせる気で花を買い　貝塚市　津田　千舟
掃除夫と掃除婦となり共稼ぎ　同
面会の話も放射能に触れ　同
病院のマイク牧師が来た報せ　同
恋人と逢うのに「世界」持つて出る　京都市　坂野壽利庵
採用す但し二箇月臨時なり　同
座談会（笑声）の中に僕も居る　同

安全の知識と川柳

丸尾潮花

一日二十四時間と言う時間は人間が神様から与えられた自由な時間である。しかし、その内八乃至十時間と言うものは色々な研究や企業又は生活の為に人として当然提供しなければならない時間であります。此の与えられた二十四時間の内に、自己の過失に依り自からに傷をつけ、他人に損傷をあたえ、或は死に至らしめて、その家庭を悲嘆の底に沈めよと神様は決して言われないでありましよう。しかるに毎日の新聞紙上に、ニュースに、火災又は交通災害爆発事故に依つて傷つき死亡する人達の無い日はおそらく有り得ないと言つて決して過言ではない程災害が発生しているのであります。最近の交通事故では阪急の圧内事故、一人か、二人の不注意な人間の有るために多くの人が傷付き死んで行くのであります。世に言う災害の二パーセントは天災地変に依る不可避なものであり、九八パーセントは人間が起すさけ様とすればさけ得られる可避的なものであります。如何なる災害に於きましても、その一つ一つが家庭に連つていないところの災害はないのであります。自分の不注意過失に依つて母を泣かせ妻や子を泣かせていいとは誰も決して言わないでしよう。

若葉して彼女の窓はもう見えず　玉野市
脊の炙てれくさそうに医者へ向け　同
出世より貴男の愛がほしいなり　渡辺あきら
春風のなか東郷青兒の女ゆく　同
石の仲間よ嵐を堪えた石の仲間よ　同
赤い目の鳩よお前も泣いたのか　大阪市　高田　一夫
窓下へ花屋が春を告げてくる　同
ダンサーの案外地味な夢を持ち　同
昔なつかし空には今日もアドバルン　同
つき出しの辻占を読む膝枕　姫路市　難波　愁夢
とつときの顔で愚妻が後へ跟き　同
袋ごと貰つて脊の子は眠り　同
冠木門杖ほどもある靴すべり　同
相手より美人と意識した素振　玉野市　迫田美婦適
貸金に触れずちよく〳〵顔を出し　同
煙草の火借せと云う顔凄う見る　同
釣錢へ酔つてはいないとこを見せ　松阪市　萬濃　修
パチンコへ汚職の出来ぬ顔が寄り　同
連れが有る時は値切らぬ市場籠　同
退院は風鈴だけの置土産　和歌山縣　西岡　春風
僕も療つたんだからと主治医に励まされ　同
マヽゴトの夫婦喧嘩も妻が勝ち　同
二死満壘オヤジも剃る手チト休め　天理市　菱田　滿秋
渡米にはお妾らしいのも送り　同
座り込むコツ子の方が知つている　同
逢えばたゞ默つて歩くだけなのに　倉敷市　野田素身郎
不言実行いきなり唇を奪い　同
誰からも心配されないのも淋し　同
ニューフェイス親の威光がちらひかり　欽田市　菊田いさむ
もう一度襟を直して来る表　同
夫婦してしやつくりが出る面白さ　同
恋人へ逢うネクタイも結ぶ妻　岡山縣　山田ゆき江
忘物とどいてうそがばれちまい　同
集金と知つてか奥から声もなし　同
バラック住いこれから蠅と闘わん　石川縣　石川素百々
すねて見てまだ物足らぬ四疊半　同
女工哀史工場主の太りよう　同
挨拶がすめば仇名がついており　岡山縣　太田　又州
子は既に他界してます稀壽米壽　同
叱つても犬恋人へ吠えかゝり　同
江戸つ子も九州弁も居る社宅　兵庫縣　吉原　紅月
酔うてゝも鮪の刺身だけ喰わず　同
二日酔なぐられたとこ痛みかけ　同
見て見ないふりで同職見て通り　宮崎市　野口卯之助
気兼した声で隣の鶏を追い　同
いびきまで親に似すともよかろうに　同
筆陣へ大臣せゝら笑うのみ　大阪市　石田　沐天
返したらしまいと汚職しらじらし　同
一アイス祖国ゆるがすメモを持ち　同
寄り添うてもう歩かない五十すぎ　和歌山市　秋月　宏方
女には泣く手拗ねる手甘える手　同
出世して小菅の飯の味も知り　同
三帖の狭さを客へおどけて見　岡山市　宗高八ツ茶
子の爲に稼ぐ月日は夢の様　同
養子たゞ笑うて居つて気に入られ　同
扶助料をもらいパチンコプロと云う　津山市　檀原伊佐武

勞災の補償義足も氣は癒えず　秋花

災害をこうむる事に依つて、労災又は事業主公務団体等に依り何がしかの補償、賠償を受けたとしても、その金額に依つて、その母や妻や子が何日生活を持ちこたえて行けるでしようか？　傷口は癒えても精神的な不具者としての淋しさ苦しみは一生不幸なものを感じさせるでしよう。

しまい風呂一本足が飛んで来る

私達はこの句を泌み〳〵と味あわされるのであります。今から千二百年以前の宝暦年間に於いて俳人一茶が家庭安全に目覚め、安全の先駆者として恵まれない家庭環境のなかにあつて愛を詠み安全を詠んだ句が相当な数にのぼつて居ります。

喧嘩すなあいみたがいの渡鳥
われと来て遊べや親のない雀
母馬が番して飲ます清水かな

などの句を見る時一般庶民の胸に泌み〳〵と愛情がにじみ出て胸を強く打たれるものであるので有ります。此の一茶を生んだ富山県の日本カーバイト会社では一茶の心を思い、安全推進運動に心を持つ様になり、安全指導員を養成教育し、指導員の終了会の席上で「人生で何が一番倖せかの質問に対して一人が親子四人が揃つて明るい電燈の下で元気で夕飯を喰べることである」と答えた様に、真の幸福、倖せと言うものは、家庭の安

不束な娘でと賢母の嘘を云い　同
寢てた子が起きても一度分け直し　同
こゝまでと講師講義を切り賣りし　大阪市　藤村　梨花
さばけてる積りやつぱり妬いてゐ　同
抗うて生きてる指の節高く　同

大島にて

去つた人フト思わせる落椿　岡山縣　梶尾　節子
噴煙に異郷をフツト感じさせ　同

箱　根

一泊の宿から富士が美しい　同
送膳羽織も一しよに届けられ　岡山縣　中田　野川
鰥会なんと不良を寄せた事　同
仲々に妓炬燵へ寄らぬなり　同
菜の花が外野に匂ふ草野球　八代市　測川　秀敏
水を撒く道にも三十八度線　同
お母さん仕事し過ぎて叱られる　同
闇米と知らず赤帽肩へのせ　岡山縣　南部ひでを
便所まで附合わされて友はよし　同
人形賣場コケシの如く賣娘いる　同
虚子の句を掛け丸ビルの社長室　京都市　堀口　欣一
千円の会費今度もやめにする　同
中之島若さは雨の中を漕ぎ　同　春名　米花
そむた川原良乙女の恋しのび　岡山縣

島津邸日時計

名君へ時を告げしと目盛石　同
桜　島
景の島詩の島を說くバス乙女　同
鍋のぞく夫と暮しあき足らず　大阪市　永田都詩子

拾い屋の眼に淀川はのどかなり　同
水を恋う季節となつた子のたらい　同
笑つてた訳を看護婦きいてゆき　大阪府　赤松ＡＴ公
チヤルメラがミシンの音に消され　同
義理があるから打ち憎い玉手飛車　同
死ねと云う扱いされて死ぬものか　岐阜市　石神　古木
いつかゝか主治医のタイも春の色　同
ライバルに奢られている不甲斐　和歌山縣　北平よし子
看板まで粘つてとう〳〵切り出す　同
酒宴今音痴の歌も出て盛ん　石川縣　中松　一恒
出世主義捨てよと出世したお方　同
琴の音に花は散るべきものと知る　大阪市　安井　蜂呂
紙屑もすてなかつたと立志傳　同
降ると云う予報へ子供あきらめ　京都市　坂野はん平
男の子顔中口にしてわめき　同
櫻ではおまへんお酒呑みにゆく　出雲市　久家代仕男
いさぎよくあきらめましよと云うたけど　同
藁屋根が四五軒ここも東京都　金澤市　滝田　柾風
青春を兵ですごした松葉杖　同　川西　去水
寢苦しい暖冬蚊まで連れて来る　赤穂市　同　佐藤　泰之
処女の呼吸迫るが如し理髮台　出雲市　同　中塚　夢生
迷い子かと思えばませた家出の子　同
オーミステーク悪夢でしたが済まされず　尼崎市　同　池田　古心
罪の子へ老父靜かに眼を伏せる　同　同　大塚美能留
スクリーンを拔け出すゴリラに声を上げ　岡山縣
革鞄持てど百姓見破られ
水爆的などと宣傳拔け目なく　岡山縣

全であり、安全とは家庭の幸福であり安全は愛の運動であると言えるのであります。

幸福を夫人は金でないと知り　春巢

日常の運動に致しましても細心の注意を払つて交通信号を無視したり、車の乘り降りに人を押しりた突きのけたりしない様に、皆様の家庭の幸福のために安全を日常の外出に認識して頂きたいと思うのであります。

信号の赤が恋まで遮断する　花子

醉いどれもヂープが来るとしやんとなり　尋四

シグナルは青だそらゆけ子澤山　一瓢

針一本でも縁先や庭に放りぱなしにしない様に

踏み拔きは自分の捨てた釘と知り　和雄

それでは災害による一年間の損費と言うものは金額にしてどれ位の額になるかと言いますと二十七年度の統計では、直接、間接損費を含めて、実に一、〇〇〇億円となり、此れ丈けの金額で何がどれほど買えるかと申しますと二五の水力発電所が完成され、一万噸級の貨物船が六五隻建造され、庶民住宅が三〇万戸も建ち、ミシンなれば四〇〇万台が買えると言う尨大な驚くべき金額になるのであります。国民の一人、一人が注意することに依つて日本経済の上に大き

お喋りの電車が動き出して降り　和歌山市
出来るだけ善処しますでそれつきり　大阪市
ランドセルもう喧嘩までして帰り　岡山縣
手製ですと云われ気軽に膳につき　大阪市
イヤリング或る日故郷の母を恋い　岡山縣
恋人をのせるつもりで空気入れ　山口縣
花の下一杯ほしい顔で佇ち　群馬縣
凡人の目に国宝の煤けよう　大阪府
席順の不服無言でついで飲み　大阪市
木の匂残して大工みなかえり　岡山縣
ざあますも今日は緑の羽根に佇ち　岡山縣
春のどか踏切番が嫌になり　岡山縣

映画「君の名は」を観て

我が恋に拍車をかけて呉れた様　大阪府
足音でキッスは明日にまたあづけ　大阪府
たゝづめばタクシー蠅の様に来る　大阪市
吊皮の背廣谷町おもわせる　大阪市
対手見て金のないふりして別れ　同
商魂の露骨な医者で頼りなし　岡山縣
病窓へ春の一日未だ暮れず　同
気持だけ病忘れる散髪し　大阪府
着肥りを肥えて居るとはこそばゆ　同
俳は此の手此の足未だ残り　大阪府
乳母車自轉車大きくよけてくれ　同
相談欄他人事でない記事を読み　大阪府
儲けたんかいなと新築振り向かれ　同
いける口花の散るのを気にし出し　大阪市
春の宵女の肩のやわらかみ　同
金運がつけば女もついて来る　岡山縣

肋骨の数を減じて生きる道　大阪府
住宅が当つたとたんに失業し　同
パチンコへ小さな慾がひしめいて　同
かつぎ屋に味方する気で持つて　岡山縣
処女の夢東京駅も恐がらず　同
食べたもの復唱させて子を帰し　大阪市
女なる愛の中にも家事思い　同
守衛皆起立社長の車が来　岡山縣
冷やかな態度名刺を出しそびれ　同
生涯を土と暮した温和な瞳　大阪市
理想高くピアノの前で年をとり　同
ボスの子の名は先生もすぐ覚え　岡山縣
髪を梳く腕の白さがあらはにて　同
水盤へお玉杓子が泳いどり　愛知縣
ブレーキをいきなり踏んだ向つ腹　岡山市
恋もない私にウインド派手なこと　岡山市
百貨店迷い子出るほど儲からず　同
レコードの針には針の道で行き　岡山縣
散つた花もう掃除夫の手にかゝり　同
保守合同水爆の世にモタ〳〵と　出雲市
商用で櫻の散つた京に入り　同
呼捨てにされない女事務きれい　貝塚市
正直なひとへ世論はまだ残り　同
義理さえも忘れ女は強う生き　堺市
大阪市まだバラックのある所　同
春の夜を金で割り切る人と座し　福岡縣
カタログを集めてミシン未だ購わず　同
自轉車を習つて妻の気の若き　大阪市
勇退と言う表現で職を辞し　同

同　深見雅樂太
同　小林　夢介
同　早川　野甫
同　安原　斜木
同　増本　翠露
同　永松東岸子
同　岩川　寛虚
同　小野花園子
同　岡　一門
同　竹原　雲平
同　小島さぎす
同　圭水
同　岩田十三楼
同　西川　惠風

那須虎兒朗
同　安井　久子
同　浜口志賀夫
同　岡本　鳥石
同　荻原　竹郎
同　片山　百郎
同
岡島　孤舟
同　不二田三夫
同　大町　別城
同　難波　櫻天
同　横倉漫多朗
同　鈴木　風鈴
同　清水　望峰
同　及川　南洋

な進展を見ると言うことも合せて考えて見なければならないでしよう。一昨年或る会社で（実例）二十歳になる女事務員が便所で一本の煙草を吸うた事によつて若い命を捨てるに至つた事故が起つたのであります。それは、会社で便所に虫が湧いてどうしても滅す事が出来ないで困つている時、カーバイトを入れると死んでしまうと聞き、カーバイトを糞槽の中に投げ来んだ為ガスが発生して居たのを知らずに若い女事務員が便所に入り煙草を吸うためにマッチをすり一口吸いつけて、マッチを糞槽に捨てた瞬間音響と共に爆し屋根は吹き飛び、事務員は福から爆風をうけて外にほり出され死亡、便所の中には九本のピースとマッチの箱が散乱していたと言うのでありますが、一体これは誰の責任でありましよう。カーバイトの様な爆発危険物を多くの従業員の使用する場所に投げ入れ使用禁止の貼紙、或はそれに対する何等かの処置をとられて居なかつたと言う事に原因するのであります。どうか皆さんの御家庭の一人ひとりが緑十字の安全に心して、神様から与えられた二十四時間を一人の過失を起す人もない様に一家揃つて明るい夕燈の下で元気に語りあい年ら夕餉の箸をとる様に致したいものだと願つて居ります。

茶碗の丸さ仕合せに満つ山雨楼
その日ぐらしも軒に雀がこぼ

下町に住み赤い緒がよく似合い　下関市　中村九呂平
開店にこまゝ〳〵友が気を使い　同　三好　兵六
驚かしてやろう留守番米を研ぎ　神戸市　同　三好　澄泉
がま口へ奢る限度の札を入れ　大阪市　同　福永　凡八
角かくしどうして二度目とは見ぬ　大阪市　同　古閑森　行々子
停年の土産か長をつけてくれ　六郷田市　同　坂本竹ん馬
耐乏は櫻が散つてからにする　滋賀県　同　久保　和友
女患室見舞えば襟を直される　石川県　同　伊藤　光二
兒の智慧が匙より箸を持ちたがり　玉野市　同　福田　卓風
木の枝の箸も楽しいピクニック　出雲市　同　国正兼比羅
婚期などいらぬと捨てゝ社に坐り　米子市　同　勝田　正郎
打明けたのに奥さん無表情　岡山県　同　赤塚　楽天
左派の左派という友達を信じきり　大阪市　同　杉森眞沙魚
発車ベルハンカチ少女の如く振り　大阪市　同　中辻　橋村
ほれた熱ためされている四月馬鹿　大阪府　同　赤塚　楽天
運動会妻に子供を頼まれる　大阪市　同　池戸　桃村
スターにはなれずじまいで年齢をとり　石川県
恋敵さぐつて見れば兄貴なり　岡山県
泣かぬ子は乳も貰えぬ政治をし　岡山県
出発に初めて握つた女の手　米子市
パチンコへ寄れぬ銀行出た鞄　米子市
善人の嘘へ駄目押す刑事室　大阪市
冬物よ又逢う日迄グッドバイ　大阪市
値下げしただけ手をぬいて舌を出し　大阪府
七回忌親父の偉さわかりかけ　大阪府
同情は家裁も離婚承諾し　大阪府
税吏去に社長威厳を取り戻し　大阪府
湯加減をクシャミで知らす貰風呂　大阪市
首切りの旋風肩まで迫つて来　大阪市

今日も又嘘賣つて居る蛇つかい　大阪市　川口　秋香
悔ゆるとも今はすべなし汚職族　石川県　清水　山花
世にうとい祖母も汚職のこゝに触れ　和歌山県　久保田青竹
栄養の足つたマダムは痩せたがり　倉敷市　岡野風の子
水爆実験
ふぐよりも恐い鮪となりにけり　山口県　加川　成人
本来性は善なり喧嘩ばかりし　岡山県　佐々部　禎佐志
看護婦のテニスに若さ寝て居れず　倉吉市　横山　宣昭
苦労などいわずよいお子ばつかりで　京都市　松下京一楼
季節女中去に
ホロ酔でチトたよりない祝い事　西宮市　小浜　牧人
まあ喫えと儲けたらいい富士を出し　具塚市　芝原　洋史
颯爽と行くけど月賦の服と靴　大阪市　宮崎　貴代
入学は補欠であつたとは云わず　岡山県　国富　直人
お二階の方が儲けている時世　具塚市　伏見　兒郎
恋をしてから病状が持ちなおり　和歌山県　谷口喜久治
汗もこゝろよしボートに君と僕　大阪市　金井　文秋
言葉数減つて友情恋となり　和歌山県　津村　美子
弁当はこゝらで喰えと折が散り　出雲市　石橋万古人
何事もきかぬ顔して毛糸あむ　岡山県　多田野保子
すき焼へたまにはお前飲めという　神戸市　眞鍋　悦朗
本当を云えば旦那と別れる気　石川県　桑山　とよ
もう一寸一寸と母は送つて来　岡山県　大石　一久
居眠られても悪うない隣肩も貸し　岡山県　富池　茂人
強情が祟りのれんの色もあせ　大阪市　木村　十悟
有るだけのオモチャ出さぬる子のはしか　神戸市　岩田　一夜
女房も浮気で対抗してあわて　岡山県　菅田　眞
入選を紙面の隅に見つけ出し　玉野市　星川　陽石
鞄持ちついに鞄を持たす身に　奈良県　木村　喜男

夢裡さんを憶う

西　いわを

夢裡さんとの交友は入社以来から始まるから凡そ三十年近くなるが特に心易くなりかけたのは社内で川柳を始めてからであつた。

夢裡さんの全貌は三月号に路郎先生から詳細に掲載せられたから省略して川柳の持つ繋がりが如何に私の生涯の印象に残つたかと云う事に就て少し書いてみたいと思う。

昭和何年であつたかは判らないが戦前であつた事には間違いない柳友夢裡・青児氏との三人、初夏と云うても六月初旬葉桜の頃三重県湯の山に清遊した事があつた。

お座なりの作句をしながら夕食をとり女中のすゝめるまゝに河鹿の声を聞きに出た。湯の山一帯は鈴鹿山脈に連らなつている高地であるが、渓谷美にも富んでゐる。橋にもたれて暫く時をすごし河鹿の啼声を聞いた。ところへ橋の向側に鄙びたカフエーがあつて誘われる儘に旅の何んとやらで話す中若山牧水に私淑していると云う女性が夢裡さんに明日の朝『蒼滝』で歌を作ろうと約束をしたのだそうだ。

そんな事は酔つた上の約束事まるるよ

いくら乏しくとも私達川柳人は健康で明るく企業に生活に研究に献身できる倖せを持ちましよう。

路郎

お花見を先にレコード出来て待ち　山口縣　徳光　秋人
旅に出てやつぱり旅の麦の出来　愛媛縣　村上　旭堂
宿願は奈良に住みたい老夫婦　奈良市　絹下　南天
未亡人二号の口をうるさがり　大阪市　和田一の字
黒幕はぬく〳〵炬燵から指図　岡山縣　富永　邦坊
反り返る課長も元は鞄持ち　大阪市　坂田　眞一
金歯をばふやして目立つ未亡人　石川縣　和田　紫苑
恩給でおやぢ威厳をとりもどし　京都府　柿本　古竹
家庭菜園枯れているよと子が教え　神戸市　野村　初甫
看護婦に頼めば彼女かと聞かれ　貝塚市　榎本　靜德
丹前のチト重くなる花便り　和歌山縣　深田やよい
亡父の話がはづめば貞女めき　神戸市　丸川　善男
享樂に溺れ汚職に巻き込まれ　和歌山縣　坂本　斗南
生字引捨てた野心を子に望み　大阪府　前田　夢郷
直ぐ癒る積りが三度櫻咲き　大阪府　松村　浜小
美容術したのに誰も振り向かず　大阪府　井口　春雪
退院は浦島太郎にさも似たり　大阪府　金谷夢十郎
知り度いし知り度くもない肺知識　大阪府　大橋　溪泉
通る人皆幸福に見えて病む　大阪府　阪井　雅方
不義の孫顔見りやはり俺も折れ　大阪府　荒川　勢園
恋人は泣いてもすねても美しく　大阪府　歌川　歌扇
女客来れば二号とすぐ思い　大阪府　奥村　涙香
署名してあとから理由読んで居り　大阪府　喜田喜多八
見舞の子藝者ワルツを唄て去に　大阪府　尾崎よし坊
癒えたなら火花散るよな恋をせん　大阪府　三木　夢兒
先輩は失敗談を並べたて　鳥取市　德持晩稻子
備けてる会社騒音はゞからず　廣島市　御戸　凡平
青空の女にパ、とたかられる　柯内長野市　森本黒天子

散髪屋世間話に乗る鋏　西宮市　東浜　成子
廣告と家計簿ちよつとくらべて見　岡山縣　西山　晴々
女教師の腕細し今日は花活ける　愛媛縣　横田　放人
原子灰捕獲どころの沙汰でない　出雲市　原　章坊
中一日病欠にして家族風呂　新潟縣　高野　不二
惜別へやつぱり涙出る女　出雲市　平井　芳風
ハイヒールはいて脊丈をくらべて見　尾崎市　針重　白雨
妻の靴出してあるなり共稼ぎ　尾崎市　林　澄子
末つ兒に案内されるハイキング　尾崎市　眞野　逸風
水虫の様なしつこい男知り　今治市　越智　義夫
押賣へ睨みきかせる元准尉　倉敷市　長尾　越鳥
町育ち嫁は釣瓶を持てあまし　玉野市　推名ひさご
商魂は値下げの意地も持つており　大阪市　丹波　太路
ウインドの柄見る妻に遠く居る　倉吉市　奥谷　弘朗
宝塚お前も四十私しや五十　鳥取市　岩田天保錢

大阪・名古屋・宇治山田を結ぶ
近鉄特急！
大阪一名古屋　2時間55分
大阪一宇治山田　2時間
名古屋一宇治山田　1時間42分

大阪上六発	7.40	8.40	11.40
	14.40	16.40	18.40
名古屋発	8.00	9.00	12.00
	15.00	17.00	19.00
宇治山田発	8.50	9.50	12.50
	15.50	17.50	19.50

座席指定特急券5日前から近鉄案内所で発売
近畿日本鉄道
大阪市天王寺区上本町六丁目

〳〵よと朝日の昇るのも忘れ床の中に居た処へ昨夜のカフェーの小女が呼びにやつて来た。夢裡さん一人やると帰れん事が起つたら厄介と吾々もお供することゝなつたのは事実であつた。それから先は読者の想像に委すことゝして置こう。

序に書いておくが昨夜は宿の丹前のまゝで出かけたので一文の銭も持つて行かなかつたが其の頃は宿の浴衣や丹前で何旅館の客と云う事が判つていて金無しでも相当遊べたものであつた。今は思い出の記念として土産に買つた山桜の塩漬焼が三人の家に残つている事であろう。

京都に住んで此処が自分の死場所と話していた夢裡さん、死場所を得たと云えるが、もう少し生かして作句を共にしたかつた人である。誘われゝば否とは云わない夢裡さん今後の吟行の約束をしたまゝ逝かれたのは残念の限りである今は亡き人の瞑福を祈つて追憶に浸る。

三、一五日

にきびとり美顔水

雑筆春秋

いのち五題

福田山雨楼

概ね初老をこえそれぞれ専門の権威者達である。数年前もう中老になつた某大学の教授連(文科系)が某日会合を開き、あとの時間に九十七になつてなお達者だと云う一老爺を招き長寿法について聞くことになつた。「何秘訣なんてものはありやせん、まあ取越苦労をせんこつちやな」「何か食物とか日常の生活で気をつけることはありませんか」「そう云えば女は早く断つことが肝心じや」「おじいさんの場合は？」「わしかわしは早い方じやつたよ」「おいくつのときからですか」「わしは早うてな八十の時だつたよ」「……」学者連はもうこれ以上聞かなかつた。そして希望に満ち有意義な会合を終つたと云うことである。

○戦前主戦論者であつた僕は敗戦後平和論者に一変した。国連の動き、「世界は一つ」の運動、宗教団体や婦人層の平和運動、軍備縮少の趨勢、未開発後進国への経済援助など世界の情勢は恒久平和への願望がもり上つていると信ずる。僕自身栄養失調から肺を犯され長男には戦死され、戦争の惨禍は十分に体験しているので戦争は今後再び地球上に起らぬようにと、世界の世論もあらゆる階層を通じて平和への方向を辿りつつあるものと思つている。

ところがはからずも僕はK氏と云う戦争論者に出くわしたのには驚いた。K氏は昭和六年東京帝大土木工学科出身の俊才、戦争中鉄道部隊付の軍属としてマレイ、ビルマの戦線で活躍し終戦後無事帰還したのであるが、当時高等官三等であつたから大佐級である。K氏はあくまで冷静にのべるのであるが、その戦争肯定の論には耳を傾けざるを得なかつた。K氏はこう云うのである。「戦争はバクチのようなものである。必ず負けるものとわかつていれば誰もやるわけがない、勝負がわからぬところに魅力があるのである。そして勝つた時の征服感と云うか愉快さは想像の外である。原爆ができてもどんな新兵器が生れても戦争が勝負である限り、未来永劫人類と共に終息することはないであろう。トバクと売春が止まらぬのと同じ理窟である」

○徳三峯と云えばかつての柔道の覇者、七段であつたか八段かとにかく実力日本一をうたわれた剛の者であつた。その剛傑が先年溺死したと云うことだから不思議である。江戸川が洪水のためはんらんし低地にあつた人家は孤立の状態で危険にひんしたので、人々は濁流を泳ぎ渡つて避難した、中には十四才の少女すら泳ぎ切つた。ところ徳氏夫妻は金槌組だつたのでどうすることもできず無念にも水に呑まれたと云うことである。将棋の名人が碁の方は皆目ダメだつたと云うのとはわけが違う。

○H氏は僕が湊町保線事務所に就職した数年前まで同所にいた。大正初年頃の話である。H氏は当時日給八十銭の雇員であつたが、縁談に当つて月給八十円だとふれ込んだ。先方がそれを信用したので縁談はすらすらと成立した。特に美しい娘さんであつた。しかし隠すより表わるるはなしで、真相は間もなく露見したからたまらない。若妻はだまされたとばかり胸一ぱい憤りを抱いてH氏と別れ実家へ帰つてしまつた。さあH氏の煩悶は一通りではなくあれこれと思い悩んだ結果、失恋から神経衰弱となり果ては自殺を思い立つに至つた。鉄道、身投げ、毒薬、刃物、首つりとあらゆる手段を試みたが、いざとなると気おくれがして決行できなかつた。悲観といらだちはつのるばかりであつた。

丁度その頃和歌山に博覧会があつてエレベーター仕掛けの展望台が設けてあつた。死場所を求めていたH氏は和歌山に来てこの展望台に目をつけた。そして看守のすきを見て台の上から身をひるがえして飛び降りた。ところが死神に見離されていたH氏はまんまと助かつた。トタン屋根の上に落ちたので屋根がくぼみ軽傷で済んだ。あとでH氏は「飛降りた瞬間これで死ねると思うと何とも云えず気がすつとした」と述懐したそうである。

女というものは

藤本茶々

此の頃街のニュースに平林たい子女史の離婚問題がある。女史はかね〴〵離婚の意志のもとに話合いしていたらしいが、夫にいきなり女中との間に出来た子供の写真を見せつけられて、カツとなりそこら辺りのものを、投げつけるやら、夫の服をめちや〳〵に切り刻むやら、そのあげく今更絶対に別れないと、うろたえ泣きわめき醜体の限りを尽した。女史の言分では夫が何事もなく、大人しく別れるのなら何も云う事はないのだが、六年間もだまし通し、しかも自分の家に使つていた女中に、子供まで産ましていた事が我慢ならないそうだ。

日本でも代表的女流作家の女史のあのうろたえ方は、苦々しく思う一方、やつぱり女だなと同情もする。学問もあり教養もあり相当の人生経験も身につけていれば、世間体もあり、自分の人格の裏付にも、誰しも無理にも利巧らしく振舞いたいだろう。所が女の心情をさらけ出してしまつた取り乱し方は心憎くもありまことに正直でいゝではないかとも思う。

犬も喰わないような夫婦のいさかいに、他人がとやかく言う筋合いではないが、男というものはとかくエライ女は苦手らしい、相当のはにかみ屋のくせに、女に負ける事が大嫌いで、たとえ自分にそれ程の力はなくとも、女の人を何らかの意味でいたわり救つてやりたいものらしい。女史の夫も評論家としては一家をなしているだうが、何かにつけ女史に押され気味となり、一番休息することの出来る筈の家庭が窮屈で居たゝまれなくなり、自然外に慰安の場所を求めたに違いない。

ともあれ女中の問題については、先達ての海老蔵の夫人の事今度の事にしろその人格を、まるで無視したやり方には、昔からの封建性の気分がどこか隅つこに残つているようだ。女史の場合も相手が自分が使つていた女中であつた為によけい腹が立つたのではなかろうか。長屋のおかみさんのようなのぼせ方から早く抜出して、数少い女流作家としての女史の情熱あ

る作風、本能を追究するするどさを今後ます〳〵円熟さす様祈つて止まない。

去年賑わした、愛人のために自分の首をかけた京都の郡教授、たい子女史とは反対の立場だが、愛人に逃げられた悲しみの余り、その赤い長襦袢を身にまとつて慕つていたという。あれ程愛されて見たいワ、とは或る女学生の述懐だが、愛人を独占したいために、いろいろ変態的な行動を取るのも、たい子女史のあのうろたえ方も似たりよつたりだ。

郡教授にしろ、たい子女史にしろ、一応文化人として世に出ている人達のなし方に就いて非難はして見るものの、男と女の本能の醜さをまざ〳〵見せつけられ、人間同志のきたなさを今更思い知らされたが、所詮女は女らしく、男より一歩退いて、間違えても先にはさえずらないよう心掛けている方が無事らしい。夫と妻は半身と半身を合せたものどちらの半身が不髄になつても平衡を失う。その調節はやはり妻が取つて行かねばいけないと思う。男は小廻のきかないものだから、あまり男女同権を振廻さない方が平穏のようだ。

妻の役目の何と重大なことか。

葭乃先生の句に

福寿草松にしたがい候かしこ

改めて嚙みしめてみたい。

三、七

川柳人の世界巡り

白砂旋風

第二次世界大戦勃発するや、ドイツのヒットラー総統はナチス主義国家の本領を十二分に発揮して見る〳〵内に欧洲全土を席捲して仕舞いました。次は此の連戦連勝破竹の勢を以つて一気にドーバ海峡を渡つて英国本土に攻め入りこれを占領する大策戦を樹てゝ居りましたが、英国が世界に排戦する無敵艦隊の威圧に屈服して、此の国を睨した世紀の大冒険は遂に断念の止むなきに至りました。然しヒットラーは此の埋め合せとして、今度は空から英国全土を破壊することに躍気となり、科学国ドイツの全智全能を傾注して考案したロケット弾が完成しました。当時既にドイツの占領下にありましたベルギー国の海岸近くの山中に、此のロケット弾発射台を設置して愈々大々的にロケット弾戦術の火蓋を切りました。僕が戦時中アメリカのパラマウント会社提供の世界ニュースで観ましたものは、今しもドイツ軍陣地から発射した此の細長い空の怪物はドーバー海峡の上空を凄まじい音響と鉄鉋玉のような超スピードで其れは僅か四、五秒というアット言う一瞬間でありましたが、次の瞬間にはもうロンドンに向つて其の姿を没して仕舞いました。斯くの如く第二次世界大戦に革命的新武器として初登場し、世界戦術史を一変させたと言う此のロケット弾V2は、日夜を問わず又場所を選ばず伝統を尊び歴史を誇る世界の古都であり、又大英帝国の心蔵であるロンドンにウン〳〵と物凄い唸りをたゝして落下して行くのでありました。此のロケット弾V2一発の爆力は物凄く強大でいうに一ブロック内を全滅さすに足る破壊力を持ち、従つて首都ロンドンの蒙る損害は非常に甚大でありました。其れは恰も現世の地獄絵図でありました。此のようなロンドン市民受難の或る日英国首相ウインストンチャーチル氏は、自ら此の被害地視察にやつて来ましたチャーチル氏は英国人好みの黒ずくめの服地に例の如く、太くて長い黒味を帯びた特製の葉巻を燻らしながら、ニコ〳〵顔で罹災地区域を歩行で一巡し首相専用の自動車が停車してある処に帰つて来ますと早くも幾千と言う群集に取り囲まれました。其の群集の顔は皆重く深刻であり其れは失意と笑いを失つた病人の顔でありました。其の顔と顔が一斉にチャーチル氏に向けられて何かを哀願するように感じられました。すると首相は逸早く此の群集心理を察知して矢庭に自動車の座席から立ち上ると、口にしていた葉巻を右手に持ち英国流の川柳をブツ放しました。其れは次のようなものであります。諸君若しも皆さんがお望みなら小生からヒットラーに電話して彼に此の後仕末をさせましようか。カラ〳〵と笑いながらそう云い終つて自動車の座席に腰を下さんとしますと、俄に群集の中から中年の一婦人がウインストン〳〵と首相の名を呼び捨てにしながら私にヒットラーを呼んで下さいと叫びますと、アチラからもコチラからも此の婦人の叫びに相和する者が続々現われますや、今の瞬間までカーテンの如く重く灰色に沈み切つて居りました大気をズタ〳〵に引裂いてドウト喚声と爆笑が捲き起りました。するとチャーチル首相は口にして居た葉巻を今度は左手に持ち右手を高く差し上げて、人差指と薬指の上端を広く拡げてVCTORY（勝利）のV型の字につくつて其れを群集に示しつゝニコニコ顔の上機嫌で、自動車の白煙を残してサアツ〳〵と引揚げて行きました。僕は此の世界ニュースを観ながらチャーチルは必ずヒットラーを倒すであろうことを予見しました。其れと同時に川柳人である此の豪胆と不屈の大政治家に指導せられる英国民の幸福を泌々と感じたのでありました。可笑しくて〳〵其れでも初の間は文化人の礼儀作法として、出来る丈口をスボメてクツ〳〵と口に手を当て笑つて居りましたが、其の可笑しさが愈々最高潮に達しますともう一寸も我慢が出来ず、恥も外聞もケロリと忘れて河馬のような口を一杯に開けてワツハハ〳〵と腹の皮が痛くなる程笑える人は人生至上とも云える非常に幸福な人でありましよう。笑うことが人体に及ぼす影響と其の効果は生理的には内分泌を促進して身体各部の新陳代謝を旺盛にすることになれば病弱者が努めて笑うように心掛ければ食慾を増し消化を助け自然的に健康を増進することが出来ましよう。次に心理的には笑い度くても意地でも笑えない此の世智辛い世の中に努めて笑うように心掛れば自然的に人生の明るい面のみに触れて来ます。又総ての物の考え方を善意に解釈するようになります。此の楽観主義の所産として、人間は総て正直になり、柔順になり、親切になり、而して人を憐み、同情心に篤い善人のみの住む良き社会の建設になりましよう。笑うことの好きな欧米人は世界会議という緊張と厳粛たる可き筈の会議場に於いてさえも、盛んに諧謔を飛ばして満場を笑わせながら国際間の大問題を手際良く鮮やかに処理して行きます。然しこの欧米人の中でも科学者として非凡なる才能を持つドイツ人は世界会議という晴れの檜舞台に於いて、何故にいつも四面楚歌の孤立におちいるのでありましようか、其の理由は種々ありましようが、其の最大原因を成すものはドイツ人があれ程科学者として優秀であるにも係わらず、笑いに缺けて居るがためでありましよう。又彼等が其の性格上如何にもゴツ〳〵として肌触りが悪くそれに自分も笑い又人をも笑わせて其の人と親しい友となり、

内科 小児科
平尾醫院
大阪市南区日本橋筋二ノ七〇
電話 戎 一六四三番

其の人を自分の味方にするというような外交的手腕の缺如のためにドイツ人は個人的にも又国家的にも大変な損をして居ります。此のようにドイツ人の持つ民族的な缺点を国民性として彼等と共通点の非常に多い日本人は今後深思反省すべきでありましよう。川柳の本質でありますます可笑しみと諷刺と穿ちの三要素の内可笑しみと笑いの面に於て川柳が日本のために、又世界のために大いに貢献する日は刻々と近づきつゝあります。英国の巻終り次は米国の巻でありますが、其の次は中国の巻と世界を一巡し最後の日本の巻では川柳と日本文化を発表させて頂き度いと思います。

（ホノル、にて）

会陽はたのし

久保和友

岡山西大寺の会陽は毎年旧一月十四日に行われる。今年は二月十七日水曜日であつた。

岡山は川柳王国と聞いているしまだまだこの地に川柳がさかんになつていくことは確実であるから一川柳家ならずとも注目しなければならない現実なのだ。路郎師も度々、岡山へ行かれている。岡山を川柳の花咲く国に——これは夢でもなさそうである。会陽協讃川柳大会がこの日、西大寺市にあつて見物衆とは別に川柳の味を満喫して終つてから最高潮に達した会陽を見ることが出来るのだ。会陽は夜を徹して次から次へとはこばれてくるバスの波と共にあのたくましい男の裸体が町にだんだん増えてくるようになると西大寺門前はもう動く余地もなさそうになる。

ワッショイワッショイ西大寺は
若くなり　和友
水あびて裸と裸見直され　同

岡山の川柳家たち（と言えば語弊があるが）がこれに協讃して川柳の夕べを催していくということは私達遠地のものにとつてだんだんうらやましくなつていくのではないか。

協讃川柳大会に遠地からの変り者として出席した私はそう思われた。これがもつと大きくなつて全国からの川柳家で会陽を見ようという人達が一年に一回でもよい。岡山へ集つたらどうだろうか。会陽はすばらしいおまつりである。私の岡山での句会出席は先の山陽新聞社での大会と今回とだけであるが川柳王国岡山の人達と語ることも楽しいものである。あの岡山弁もなつかしいものである。三年後でもいい五年後でもいい。いや来年からでも面倒だが宿泊準備を岡山の人達にしてもらつて全国津々浦々から年に一度の会陽を見に行きながら川柳大会を、ぜひ路郎師をむかえてやつてみたらどんなに川柳王国岡山の人も全国の川雑の人達も楽しんでもらえるのではないか。一人出席して何だか惜しいような気がした。会陽は素晴らしいものである。

川柳塔・近作柳樽・一路集・各地柳壇の投句に便利で経済的な
川柳雑誌社特製
投句用　柳　箋
一冊（五〇枚綴）三〇円
送料　八円
をおすすめいたします

一路集

転勤

宮田不二選

転勤と一緒に捨てた片想い　水堂

転勤にもう犬猿でない二人　良坊
転勤の理由二人によくわかり　多久志
転勤を送り好いて居たと知り　高志
恋すれば辛し転勤涙あり　九呂平
ライバル転勤気前よく祝い　寸坊
転勤へ此所はしつかりやりますよ　とよ
転勤の椅子へ転勤坐らされ　悦子
転勤は老母淋しいものにさせ　茶々
転勤に感激もない五十過ぎ　白峰
転勤へ抱負と不安四分六分　高志
都会への転勤みなに羨まれ　七面山
転勤の主はお酒に酔うていず　雄声
転勤して欲しい上役ばかりなり　高志
転勤の此所も派と派がにらみ合い　寸坊
田舎落する転勤へ髭を立て　鳥石
絵葉書に無事着任だ飲みに来い　光郎
転勤へゴトンと三等車がうごき　晴々
転勤は知つている妓みんな呼び　白峰
転勤と決りネオンの灯へ向い　巷雨
転勤の夜の天の川ながれ星　鮎美
転勤をする度腹が太つて来　夢介
転勤が追い立てられて腰を上げ　夜潮
転勤をして人情の機微を知り　喜久治
転勤へスルメで別れあう集い　芳風
転勤は子の学校をまず案じ　満年
左遷さと羨やましつゝ転勤し　葉光
その腕を買われ海外詰になり　香林
転勤へ惜しい椿が咲き初め　一策
転勤へ庭の桜は未だ蕾　直人
花に魅け転勤の荷を纏め　良坊
転勤の庭へひよつこり露の蓋　花団子
転勤の窓の水仙こちらむく　鮎美
転勤のたびに故郷を遠ざかり　満佐志
転勤の居心地里が近くなり　悦子
闇米の高い所へ転勤し　木声
転勤の今度はお米の出来るとこ　雄声
転勤をさす事にしてけりがつき　緑風子
目出たくもない転勤を見送られ　七面山
転勤の憂き目ぐらいで事がすみ　一恒

転勤がやつとつないでくれた首　十悟人・転勤を見送る女輪をつくり　初甫
転勤先跣足で通学するところ　失名地・転勤の手続き上手い妻を持ち　巷雨
転勤はバスが一回来るところ　翠露天・転勤の親子へ冨士の曇りなし　寛虚
意外なる僻地へ転勤夢でよし　山花軸・転勤の当座給仕へさんを付け　不二
僕の転勤地方紙の隅へ出る　ひでを　転勤の眼に懐しき真知子巻き　同
新聞が転勤知らす出世ぶり　万古
転勤の傷に思い出あるタンス　茶々
転勤に思い出のある子の名前　白峰
転勤の父より母の忙しさ　初甫
佳・転勤は故郷に錦をかざる今日　山雨楼
佳・栄転も左遷も同じドラを聞き　香林
佳・送別で酔い歓迎で胃をこわし　満年
佳・引継ぎもして転勤の五時を待つ　鮎美
佳・転勤へ月賦一度に払はされ　地久平
佳・転勤の度に学校小さくなり　巷雨
佳・転勤の朝へ冷たい雪が降り　東岸子
佳・転勤へ人事課長が酌いでくれ　巷雨
佳・自嘲ふと浮ぶ転勤の辞令見る　凡九郎
佳・転勤はみかんのうまいくにつき　荘堂
五・転勤の本社は女人の多いこと　素百々
五・転勤のビルの谷間に立ちすくみ　成人
五・明日は転勤酔筆残し灯に生きる　鮎美
五・転勤の内命職員録をくり　十九平
五・転勤にあわてゝ日本地図を見る　風の子

利子

河村日満　選

月四分の記事へ眼鏡を拭き直す　柾風
利が高いなど言うこれぬハメとなり　地久平
惚れ込んだ利子へ虎の子浚らわれる　十悟
百倍も利子するように借りて行き　白峰
妻の里利子にもふれず貸して呉れ　東岸子
流れそうな背広を利子で繋いでき　志賀夫
あほらしい利子を払つて立ち直り　悦子
金少し出来て利率が気にかゝり　芳風
利子で食う暮しへ聟が来たがらず　七面山
預けてる方の利息は多寡が知れ　文秋
一度だけはきちんと呉れた高い利子　藤波
きつちりとけちんぼ利子を取りに来る　初甫
利子付ける間のない程に出し入れし　文秋
利子だけを負けて示談にして済まし　巷雨
表向き公定という利子で借り　正郎
借金の利子を借金して払い　花団子
銀行の利子なんかとみくびられ　茶々
受判は利子まで払う破目となり　満年
利子だけを楽しむ預金惜しまれる　万古
利子だけで食うて犬まで飼うており　ひでを
借りは借り心ばかりの利子をつけ　トン坊
貯金帳小さい小さい利子が付き　丁坊
へそくりを二割の利子がかき廻し　喜久治
利子だけで喰つて質素な老夫婦　牛歩
一握り利息をつけて返す米　木声
やけくそで払はぬ金へ利が重み　寛虚
いゝ暮し利札を切るに骨が折れ　夜潮
利子があつたのかと慾を出し　鮎美
利子払う身に一ト月の早い事　圭水
利子ぐらい払う予定が狂い出し　山花
妻や子は利率を云はぬ貯金帳　寛虚
利子までが真綿でしめる様に増え　雄々
冗談で云うた利息を本気にし　鉄児
銀行の利子安いけど安いけど　凡九郎
利子丈はきちん〳〵と払いに来　同
浮貸の利子で結構やつてゆき　十九平
本家から利子のことには触れず借り　同
無利子では済まない札が高つき　直人
調停は法定利子でけりがつき　同
子の蓄物流さぬ利子へミシン踏む　光郎
利子も払えぬ癖に虚栄の強き　同
秀・利子だけで結構やれるのが盗み　夜潮
秀・抽籤が外れて安い利子になり　鉄児
秀・利子程の値打になつた保険金　不二
秀・友情が利子のことから縺れて来　水堂
秀・ふみ倒す気は高利にも驚かず　丁坊
秀・返金へ利子の積りの菓子を提げ　七面山
秀・税務署に延滞利子でおどかされ　代仕男
秀・利廻りに触れて保険屋表を出し　牧人
秀・ぐるりから利子が舞い込む懐手　一策
秀・不可能の利子をつぶれてから悟り　葉光
佳・利子などに触れず郵便局を出る　九呂平
佳・大金を借りて無利子に気を遣い　志賀夫
佳・利殖法やつぱり十年はかゝるなり　鮎美
佳・質の利子流してしまう気も起り　山雨楼
佳・利子だけが残る淋しい貯金帳　雄声
人・利子だけを入れて冬物無事で居り　満佐志
地・利子で食う夢停年が近うなり　ひか平
天・利子取りに行けば鰯をやいており　方眠
軸・百株の利子遠足え有難度し

平通盛と教經

冨士野　鞍馬

平通盛は、清盛の弟教盛の長男で、越前三位と呼ばれていた。壽永三年（一一八四）二月、一の谷の合戰の時、総大將であつたが、戰地で、恋女房小宰相と、濃厚なかたらいのところを、弟教經にどなられて、急ぎ出陣したというので、

通盛は寝まきの上へ鎧を着
（タル　初）

六波羅は恋にぐにやつく人
ばかり　（万宝　八）

泣きながらした跡をふく小
宰相　（末　二）

小宰相まづいへのこでされ
るなり　（末　三）

通盛のわかれ惜しみか朝直
し　（ケイ二四）

等と、川柳はひやかし半分に詠んでいる。

「源平盛衰記」には

『越前三位通盛は、旅の仮屋にて、物具脱置て、小宰相と申す女房を、船より迎へられ、いつも会ふ夜の度毎に、睦言つきぬ中なれば、短き春の夜のうらめしさは、丑みつばかりになりにけり。能登守は、宵程は骨なしと覚して申されざりけるが、既に夜半も過ければ、高らかに

「帯紐解広げて思ふ事なくおはする事勿体なし。女房の悲しきも、子のいと惜しきも、身の豊かなる時の事也。自然の事あらば、如何し給ふべき、其の上九郎冠者は、謀賢き者にて、今もや夜討に攻め来らん、御心得有べし」

と申されければ、三位げにもと思はれければ、きぬ〴〵に起別れて、船へぞ送り返されける』

とあり、川柳子はこれによつて作られたものと思われる。また教經のどなるところも、おもしろく詠んでいる。

さてらちがあかぬ〴〵と能
登守　（拾　六）

いかん事とは能登殿がいひ
はじめ　（〃）

ビイ〳〵や唄でいかぬと能
登守　（万安三）

そしてまた、

もてぬやつ能登守程おこす
なり　（万安六）

と吉原情景にも、これを使つて作つている。元々この恋女房小宰相は、通盛の中宮亮時代の恋人で、恋文に、

わが恋は細谷川の丸木橋
ふみ返されてぬるゝ袖かな

という歌を添えて送つたのが、時の皇后（建礼門院）のお目にとまり、皇后みずから、

ただたのめ細谷川の丸木橋
ふみ返しては落ちざらめやは

という御歌を下され、そのお声がかりで、成功した恋であつた。そして小宰相は、当時上西門院（鳥羽院の御子）の女房で、十六才、禁中第一の美人といわれていた。だからこそ、最後のわかれは、一入の感があつたであろう。通盛一の谷の討死は三十才。小宰相は、あとを追つて入水した。

能登守教經は、正五位下で、通盛の弟である。平家一門中第一の強者であつた。

一門のきなかと頼む能登守
（タル　初）

「一文きなか」という言葉があつて、キナカは一文の半分のことをいうので、平家の半分を教經一人の武力でささえているという句である。

屋島では、強弓で、義經の身代りになつた佐藤継信を射止めている。壇の浦では、義經に肉迫して、八艘飛となつた。

「平家物語」には

「能登殿、さては大將に組め、ござんなれとて、打物くきみぢかに取り、艪舳にさんざんに薙いで廻り給ふ。されども判官を見知り給はねば、物具のよき武者をば、判官かと目をかけて飛んでかゝる。判官も内々面に立つやうにはし給へども、とかう違へと能登殿には組まれず。されどもいかがはし給ひたりけむ、判官の船に乗りあたり、あはやと目をかけて飛んでかゝる。判官かなはじとや思はれけむ。長刀をば弓手の脇にかい挾み、御方の船の二丈ばかり退きたりけるに、ゆらりと飛び乗り給ひぬ。能登殿早業や劣られたりけむ、続いても飛び給はず、能登殿今はかくとや思はれけむ、太刀、長刀をも海へ投げ入れ、兜も脱いで捨てられけり。」

とある。この教經・義經の立廻りか、則ち八艘飛として傳えられ、

教經を見ると義經飛つ尻
（タル　一二六）

飛んだ身の軽い野郎と能登
守　（〃　四四）

能登殿はのみを逃した顔つ
つき　（拾　五）

義經さん何か落ちたと能登
守　（タル一〇一）

義經は八艘飛んでべかこを
し　（拾　五）

男ならこゝまでござれ能登
守　（タル四九）

七尺と八艘飛んだ危い場
（〃　六二）

―七尺は始皇帝が屏風を飛越えて逃げたこと―

等と、おもしろく川柳に作られている。

壇の浦の戰は、一の谷から一年後、屋島の翌月、壽永四年（一一八五）三月で、

壇の浦能州出やと笏でつき
（タル　三）

能登殿はおはぐろつぼを提
てのり　（拾　五）

とも詠まれている。

また「平語」に

「能登殿これを見給ひて、まづまつ先に進んだる、安芸の太郎が郎等に裾をあはせて、海へどうと蹴入れ給ふ。続いてかゝる安芸の太郎をば弓手の脇にかい挾み、弟の次郎をば馬手の脇に取つて挾み、一しめしめて、「いこうれおのれら、死出の山の供せよ」とて、生年二十六にて海へつつとぞ入り給ふ。」

と書かれてあるように、教經の最後は、派手なものであつた。それをまた、

能登殿は二人禿で入水をし
る　（拾　五）

教經の入水あぶくが三つ出
ときの声聞と能登殿一つの
み　（拾　六）

（拾　五）

と川柳にしている。この二人抱えて入水したのになぞらえて

能登殿といふ身で子持湯に
這入り　（タル一四三）

能登殿といふ身で鶏を納め
に来　（〃　一六〇）

等と作られている。

川柳第二教室

戸田古方

二　川柳をつくつてみましよう

誌上なり句会場なりで、兼題あるいは席題として出されている課題を見て作句しようという考えはうごきはじめます。川柳は課題なしに作句するのがほんとうなのですがはじめからはなかなかむつかしいのでやはり題を見て動きはじめた方がよさそうです。

用具はエンピツと小さな短冊型に切つた句箋、じかに句箋にかく人もあり、一度メモか手帳に作つてみて句箋に清書する人もあります。句箋にじかに書く方は句境に入りやすいけれども、句会場などでは限られた句箋しかもらえぬ場合もありますから書き損じた時、それだけ句箋の枚数、即ち出句をへさねばなりません。それに控をとつておかぬと自分の句を忘れて、入選しても名乗りを上げるのに手間取る不便もあります。やはり一応はメモすることにしましよう。

さてどういう風に課題と取組んでゆくか。「時計」という課題を仮に選んでみましよう。

時計は時をつげる器械であります。今時計といえばコチコチ秒をきざむあの時計です。それには柱時計、懐中時計、腕時計、目醒し時計、置時計、街頭にみる大時計、動力の方からはねじ巻きのゼンマイ時計、電気時計、たまには珍らしく日時計や砂時計にもぶつかります。昔から時計の代りにつかわれていた「にわとり」、花街でいう線香時計、ローソク時計、水時計もあつたとものゝ本にはかいてあります。

これで時計の種類はほゞ上げつくした様に思います。△△時計といわない以上、これらのどの時計と取組んでも差支えありません。よくその特長を考えてごつちやにならぬ様気をつけましよう。

川柳は人間臭の濃いものですから、人間と結びつけられるわけですが、先ず自分中心に想を求めるのが自然でしよう。思い出すことの出来る印象的な経験、観察……

（一）時計をもつていぼつていた。（二）時計をもつていないで不自由した。（三）時計をおとした。（四）時計をとられた。（五）時計をおき忘れた。（六）乗りおくれと時計。（七）質屋と時計。（八）スポーツと時計。ストップウォッチ。（九）日曜日と時計。（一〇）だて時計。（一一）時計の値ぶみ。（一二）待ち合せ、待ちぼうけと時計。（一三）恋、見合、ランデブウと時計。（一四）ウインドと時計。（一五）三針計（一六）時計屋。（一七）かたみの時計。（一八）臨終と時計。手術室と時計。（一九）苦吟、〆切と時計。（二〇）喜怒哀楽と時計。（二一）旅の人、離れた人を憶う。（二二）止つた時計。（二三）おくれた時計。進んだ時計。（二四）アクセサリー。浮世の義理。（二五）にくまれる目醒し時計。（二六）大阪時間と時計。（二七）決心と時計。（二八）人生劇。（二九）時を忘れて。（三〇）時をうつ。（三一）時計の修繕。（三二）さらの時計、古い時計。（三三）時の発見。（三四）仲をとりもつ時計。（三五）妻と柱時計。（三六）自嘲。（三七）タイムレコーダー。（三八）ひまな日。（三九）隣の時計で。（四〇）駅の時計。（四一）焼けた時計。こわれた時計。（四二）長生きと時計。（四三）二度と来ぬ時。（四四）寿命と時計。（四五）のんびりした時計のいらぬくらし。（四六）時計ぎらい。時計マニア。（四七）大時計と螢光燈。（四八）秒の音。（四九）死と止つた時計。（五〇）のぞかれる路傍の時計。

思いつくまゝにかきあつめましたのでまだ他にもあるでしようし、ダブつたものも目につきます。大づかみに整理してみますと

（一）生活、性格の描写
（二）そのものズバリ
（三）自由と不自由
（四）小道具として
（五）時、生命、哲学

というようなことになりましよう。理くつはあとにして、私の指導してまいりました「みをつくし川柳会」の方々が極はじめに作られた句をとり上げて少しお喋りしてみましよう。

○〃乗りおくれ恨みは時計に八つ当り〃

よく経験する場面です。率直ですが率直すぎて余情は出ておりません。〃恨み〃と〃八つ当り〃は同じことをいつているので〃八つ当り〃といえば〃恨み〃はやめてもよさそうです。次の様にかえてみました。

〃乗りおくれとわかり時計に八つ当り〃

○〃りんじうと時計みながら手をはなし〃

〃御りんじうですと時計をしまいこみ〃とすれば、説明的なところがとれて情景が出て来ます。

○〃時計屋の時刻はどれがほんとだろ〃

童謡的な味の出た句です。

○〃喜怒哀楽みんな知つてる時計なる〃

〃なるが〃漢字で〃鳴る〃とあれば明瞭ですが仮名だと〃鳴る〃か〃時計であるよ〃と詠嘆の意味につかわれているのかわかりません。

○〃目さましは役目はたして憎まれる〃

詩情にはとぼしいが川柳一流の〃うがち〃がよく出ているおもしろくよめる句です。

○〃新世帯隣の時計あてにして〃

〃いゝ音は隣の時計壁一重〃

あとの句は前の句のいわんとするところをもふくんでいます、音がきこえてくるようです。

○〃ラジオなく時計なくとも日はくれる〃

あまりにも時計にこだわつている自分が愚しう思えて来ます。川柳を通して、日常気づかずにいる真理をみつけ出して行くことはたのしいことです。

○〃万のつく時計が売れる百貨店〃

この句では社会批判が見えます。

川柳第二教室兼題

「雨」　五句以内
〆切　六月十五日
投句先　大阪府池田市井口堂一六四
戸田古方宛

いのちある句を創れ

花地抄

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社四月句会（大阪市）

四月三日　午後六時
於光明寺

光明寺の庭の夜桜も、ほゝ笑み、嬉び迎えるかと思いの外、楽しかるべき四月句会は、路郎師の御静養に、曾つてなき寂寞たる句会であつた。しかし、たとえ、句筵はやゝ低調であつたとは云え、静かに、推敲に、すいこうを重ねて名句を生まんとする作句態度が各所に見受けられた。開会に続いて戸田古方氏の句評は、ラジオ、テレビ、映画に依つての川柳、其他、個性ある句について、越鳥、夜潮、牛耕、九呂平、七面山、潮花、大然、照坊、成子、方大、豆秋、鮎美の諸氏の句を引例して短評を加え、続いて中島生々庵氏は、路郎師の御容体は、疲労で、近く全快せらるゝと、医学上、又理事長として来会者に報告せられ、不朽洞優勝カップは次回恩師の来会御披講迄、保留すると陳べ、中島博士の保管さるゝ所となつた。後、席題、兼題の披講に入り、来月句会を楽しみに、午後九時閉会した。（摩）

出席者＝・雄声・淡舟・花村・凡九郎・黙平・水客・生々庵・潮花・ひろし・十悟・丁路・一朗・季雄・六竜子・文蝶・しげお・圭三・都詩子・正斗・紫香・一の字・球児・恒明・古方・賀峰・ひさ子・春巣・静馬・多久志・摩天郎・香林・伊三美・俊作・翠露・竹荘・三司・栗・白柳子・真沙魚・貴山・いわを・満潮・雅美

兼題「自動車」　武部香林選

三タク（ギュー）〳〵詰める子沢山　雅美
観光車お国なまりを持て余す　六竜子
自動車で早耳飛んで来てくれる　恒明
自動車の中で花嫁ほつとする　同
自動車へ百万円も置き忘れ　丁路
人相の悪いタクシーやり過し　多久志
小使も自動車に乗る札の束　摩天郎
つけ馬と自動車にのる良いきげん　葉光
好きでない人にドライブ誘われる　恒明
自動車に乗つて女は覚悟きめ　賀峰
自動車の埃が消えて朧月　しげお
自動車に乗せりゃ酔うてる故郷の母　貴山
ルームライト消して運ちゃん気を利かし　春巣
自動車へさて花嫁の裾さばき　生々庵
小型自動車八十円がこころ返えり　同
自家用も売つて社長は範を垂れ　多久志
愛された日の自動車を見送つて　水客
自動車できて飛行機で飛んで去に　しげお
自動車の傍若無人見た都会　黙平
ガレージへ秘書何べんも気を使い　白柳子
自動車を待たし泣き事聞かされる　いわを
救急車浮かれた春の街をぬけ　一の字
消防車ゆくはわが家の方へ消え　無名
自動車が来てネクタイがもさかしい　一ン十
自動車へ恩師うれしく酔い給い　水客
割り勘のタクシーも一人無理に乗せ　生々庵
バックミラー鏡を磨ぎたい時勢なり　俊作
自動車で行けと社長の忘れもの　黙平
金借りにきたこは見えぬ自家用車　俊作
高級車葉巻の煙だけ残り　貴山

兼題「保母」　富岡淡舟選

わが子には保母らしくない叱りよう　静馬
保母ある日金持の子を連れ歩き　いわを
保母さんは鼻もついでによいやり　香林
保母さんの手しつかりと交叉点　六竜子
腕白へ保母の若さが遠慮せず　雅楽太
配給の様に園児を保母とどけ　無名
人見知りせぬ児に保母はほつとする　白柳子
ちぎれ雲保母には遠き青春記　三司
縄とびにひょいと入つて若い保母　一の字
唄声は二十才の保母に透き通り　水客
鈴なりに慕はれて居る保母一人　一の字
厳格な保母と見られている眼鏡　恒明
青春の悩みを秘めて保母の日々　文蝶
先生と云われる保母のあどけなさ　香林
嬢にゆくまでを無難な保母になり　多久志
保母さんへ可愛い〻手々が繋ぎ合い　いさむ
再婚の話へ保母の落着けず　賀峰
もう保母で生きていけないスキャンダル　恒明
保母の乳さわつてみたい母なき子　白水
ぶらさがりたい子に保母の手が足りず　一ン十
後添の話へ保母の春惜しむ　水客
親の愛知らぬ子を保母強く抱き　雅楽太
保母さんの若さモンロウーに似て歩き　三司
今日はこれでをしまい保母の乳が張り　淡舟

席題「砂糖」　正本水客選

商談がとゝのいかけた角砂糖　紫香
粉砂糖いちごの香りへ少しとけ　同
奥さんの気になり砂糖持つて行き　丁路
黒砂糖童心を呼ぶ味となり　白柳子
舐めて見て之は砂糖と違う味　雄声
砂糖加減火加減コツあこを撫で　文蝶
赤砂糖キュウバの吹に育てられ　脱郎
氷砂糖噛み〳〵母も汽車の人　しげお
手のひらの砂糖はいつかなめられ　白柳子
角砂糖待ちくたびれた人と知り　恒明
角砂糖の不満は三個入れられた　凡九郎
角砂糖平凡な〳〵会話する　水客

席題「汚職」　土井文蝶選

御見舞と言うので取つた紙包み　多久志
肩書へ汚職がふえた議員さん　圭三
自動車が停つて汚職どきつとし　水客
法律がありまつさかい汚職です　古方
心臓の強さ汚職と別な顔　十悟
弁護士をたよる汚職は手に葉巻　黙平
予感した通り汚職の席が空き　水客
汚職する地位にもつけず子沢山　翠露
名刺からついに汚職の足がつき　摩天郎
女房の安堵汚職に遠い地位　凡九郎
一応は潔白だよと言いは言い　多久志
汚職から差入屋では間に合わず　古方
汚職記事から待合ひまになり　竹荘
さればとて汚職の父をほつとけず　丁路
子の汚職父はやきもきするばかり　賀峰
汚職から小使さんも水臭し　しげお
一寸もうかりすぎたなと汚職　白柳子
受取つてからの税吏はちとくだけ　しげお
汚職記事うちの社長はまだかいな　生々庵
社長室汚職と知らぬ花が咲き　紫香

席題「合図」　清水白柳子選

女房の合図は酒の切れめなり　三司
子の芝居合図またずに幕をしめ　南風郎
ともかくも合図をされて笑うこと　しげお
目つむるだけの合図でよくわかり　賀峰

合図する方電柱の影に立ち　文蝶
簡単な合図でウインチ巻き上り　多久志
合図しているのに君のどんくさい　恒明
合図して近道かけて来る若さ　紫香
ゴホンと咳したら踏込めと捜査陣　六竜子
合図などいらぬいつものメンバーです　凡九郎
顔あげたのが合図と間違われ　同
御天守の見張狼火を見逃さず　古方
レコ来てる合図拇指見る遅刻　黙平
合図を間違えた楽屋のあわてよう　正斗
手を上げた合図車掌はベルを押し　文蝶
軽鉄は合図をすれば止めてくれ　一の字
灯が点いたのを合図のように立上り　水客
合図するまでは出るなとかくまれ　竹荘
合図しただけで親友いゝ別れ　紫香
何の合図か妓やたらに目の動く　六竜子
川向う合図の旗に渡舟が出る　一の字
合図する姑に添寝をそつと出る　都詩子
合図して代理ゆつくり立上り　水客
録音の義理へ合図の拍手湧く　凡九郎
駅長の合図で桜散るごとく　水客
風の音までが合図に聞える夜　春巣
子供には聞かせる合図して黙り　多久志
妻の眼が客を表へ誘うて出　水客

雑川

淀川支部句會（大阪市）

四月九日　於　香林居

武部香林報

付き合いで下戸も花見へ手をたゝき　水堂
ペン〳〵草花見をよけて白く咲き　花村
商用を帰してくれぬ山桜　香林
会計が酔うて花見が派手になり　水堂
就職もきまらず桜見て通り　多久志
薄情な娘他人が腹を立て　若菜
真にうけて行けば薄情うるさがり　花村
薄情とそしらばそしれ火の車　香林
よい声に電話の口調も改まり　発中
喧嘩ではない鮮人の話声　花村
弔辞読む末尾の声は聞きとれず　真一
人前はゴルフもやれる様に言い　多久志
人前で話したばかりに役がつき　礼三

雑川

京都支部句會（京都市）

於　仲源寺

大鶴喜由報

人造米犬も淋しい顔で喰べ　光二郎
日曜の留守居テリヤの疳に触れ　いくを
打ち損じた顔猟犬に見つめられ　紅寿
犬連れた人に番地を聞いて見る　千代麿
吠えられた犬賞めながら荷を拡げ　光二郎
憂きことに逢えば善人因果にし　喜由
税務署へ来るとしやべれぬ人の良さ　みてい
帰る気の犬に電柱多すぎる　同
犬既に敵意を知つた五六間　喜由
一生を善人として破れ靴　よしろ
迷惑な顔へ善人気がつかず　亀一
儲けとは違い話題に欠伸する　司郎
本人が来たので話題切れたまま　亀一
酒好きへあまり呑むなと酒をくれ　みてい
自粛する顔もお酒が廻るまで　いくを
雑沓をよぎり自粛を淋しうす　司郎
砂グイと握れど悔解く術もなし　礫
母の手を握りかえして汽車の窓　よしろ
叱られる子の答弁に汗握る　光二郎
握手されながらおじぎをしてる母　司郎
寒空に小買の炭火客へ出し　光二郎
宵暗を縫う一合の酒の瓶　鳥雀
魚の荷は車掌の邪魔をものさせず　紫蘭
売出しが当り交番ふるまわれ　鳥雀
復縁を拒む盛況とはなりぬ　司郎
再婚を思う頭にジングルベル聞こゆ　豊次
不渡のまゝで再起を待つ手形　鳥雀
再起をば約束されているつらさ　誠史
再起不能銀行の門重々し　紫蘭
霧の駅再起の人を送りに来　豊次
四面楚歌の中に再起の腹が出来　甫三
久方の里一晩が短かすぎ　憲一郎
結局は表へ出るでけりがつき　東門
繁昌の店は表で荷をほどき　誠史
小商い表通へ出たい母　紅寿
儲けたい筆に身の上あばかれる　泰典
没落の身の上の雛の眼に恥じる　寿利庵
身の上を聞いて貰いに来る不幸　泰典
相談欄へくらやみの恥あからさま　紅寿
惜しみなく生きて巴里の屋根の下　司郎
ペンキ刷毛巴里の夢をまた捨てず　紫蘭
ぼつ〳〵と巴里仕込みの腕を見せ　亀一
俺ならば花の巴里で死ぬものか　ゆきら
素通りの巴里も箔の内に入れ　蘇海
うらぶれたベレーセーヌの岸に立つ　泰典
わざ〳〵巴里にて書いてある端書　ゆきら
不肖の子エッヘル塔の雲の下　紫蘭
パリー以来の瞳が合つた銀座裏　迷々

雑川

弓削支部句會（岡山県）

三月六日　於　金光教会所

福島鉄児報

ニューフェースの魅力は腰の曲線美　大公望
あの魅力いつまでつづくらば桜　令甫
若後家の魅力に負けた金を貸し　明峯
マネキンの魅力後へも廻つて見　呑天
父ちやんは土産改札越しに出し　奇童
改札へなれた閣屋の定期券　明峯
改札の網に家出の娘がかかり　牛歩
改札で他人に還える手を振られ　巷雨
改札を出て小荷物を思い出し　三平
改札へ議員バッヂは胸をはり　游子
改札を通らず制限外荷物　鉄児
かつぎ屋の荷は改札を先に越し　正平
約束があつて改札おそう出る　富至
寝た事にして呼鈴を聞き流し　鉄児
退社ベルもう手鞄をかかえこみ　大公望
発車ベルバイバイしている可愛い手　皿水
上映のベルが二人をほつとさせ　伊佐武
朝の夢惜しい所でベルがなり　貞涼
相乗りの自転車のベルは派手に鳴り　紫舟
鳴るベルへ女中欠伸を殺して出　七面山
発車ベル成巧するよと又泣かせ　笑鬼
無灯火はベルとベルとでまぎれちがい　富至
目覚しのベルの故障で少し揉め　牛歩
実家へは悲しい事は言わずおき　文郎
悲しみへ泣けぬ男の見栄が有り　風樹
悲しみの涙と姑見てくれず　笑鬼
感激の拍手が後をしんとさせ　文郎
感激の涙と知らぬ友の酒　笑柳
傷心へ又金の要る話　笑泉
傷心へ渡の音まで淋しすぎ　七面山

阪田謄写版

大阪市北区芝田五丁目二

株式会社　阪田商会

電話　福島五九九五番
五六三一～四番

傷心へ別の妓が誘惑し　鉄児
女房の嫉妬だまつて聞く傷心　風樹
傷心へ妻慰さめの猪口をさし　奇童

川雑　**宇部支部創立句会**（宇部市）

三月二十八日　於　半休居

国弘半休報

退職金娘が全部持つて嫁き　正夢
学芸会死んだ吾が娘を思いだし　同
ゴム風船持つた子供は脊で眠り　紫川
風船は風の吹きよで西東　同
店仕舞い投げうり始めて緒につけり　仙柳堂
坑夫達の声が近づく昇坑口　八歩
道端の風船売の流行歌　徳風
母親と風船玉に手を引かれ　蘇人
戦後から思わぬ人が坑夫なり　同
開店のチラシニコヨン鼻をかみ　青水
置薬紙風船もおいて行き　同
地獄門今日も冷いキャンプの灯　同
預金帳一桁減つて娘の晴着　同
開店日サービスガール張り切つて　万盛
キャツプランプはずして青い空を見る　穂波
くろだいやこつい坑夫の血が通い　同
十円の客も嬉しい開店日　土筆坊
下手糞の開店の字へ二重丸　同
坑夫皆勢揃して今日も無事　司楼
恐い程ふくらす風船屋の度胸　藤四郎
出坑へ空気の美味さ知る工夫　同
父子二代炭坑を住みよいものにする　同
制服へ娘盛りを包み兼ね　同
洗濯へ看護疲れを逃避する　同
着いた荷のまゝで売り出す開店日　倪流洞
御手盛の花輪も派手に店開き　同
ヤマへなれ坑夫の日々は鼻唄も出る　同
汁粉屋へ行くにも連れのいる娘　同
母の無理うれしく聞いて看護する　同
開店特価売場は寄せつけず　井蛙
開店のマダム汚職に養われ　同
開店の今日は損得言わぬ味　同
キャツプランプ外せば妻は子を渡し　同
行く〳〵は娘やる気の二階貸し　同
開店のたんびにパチンコ屋は儲け　半休
開店へ花輪の位置を替えて見る　粗影
ワレ風船十円也の糸を持ち　呆鴨
母の愛看護疲れも見せずいる　戊理智
風船の義理に不用な物を買ひ　いさお
上品に欠伸ころした娘のしぐさ　九呂平
神棚も明るく今日の開店日　柳慶
開店に月給日まで後三日　柳蛙
退院を看護も一緒に日を数え　蘇人
近代娘あつさりすます恋の処理　同
借金をした開店を祝われる　久美路
子の手から放れた風船高く舞い　峰秀
満員のバス風船の割れた音　柳豊
ゆきずりの娘の瞳下をむく　峯松
坑内をキャツプランプで今日も無事　午豐
坑夫皆無事を祈つて家を出る　安一
もらう目で見れば娘も気にいらず　盤茶
米呉れた親類職を求めて来　漫多朗
たゝきやは親類並の値にしとこ　春雪
系図まで出して親類名乗り合い　句浪人
お目出度へ本家の膳を借りに来る　橋村
貸さぬとは云はず親類親に触れ　同
自家用車もう親類でない姿　風鈴
親類書へ一人書けない家出の息　同
秀才の従兄持ち出し叱言云い　夢児
はる〳〵と来た親類は嫁の事　秀星
叔父さんの服で見合もゴールイン　歌扇
死んでから親類の奴金を出し　浜水
今日よりは親類になるノリト聞き　風鈴
親類の勝手知つたる水屋開け　小雀
親類の見舞は意見ばかりなり　正夢
親類へ子供預けて病みつゞけ　AT公
卒業の甥アバラ屋へ頼つて来　夢郷
女中おくことが母屋の意に添わず　楽天
親類も儲けたらしく五球かけ　雅方
親類に金を貸さずに智慧を貸し　涙香
退院が近く親類見舞に来　白蘭
会計もちと使い込む春の夜　夢郷
春の夜の肩もむ妻の手も温し　文糖
宿直が馬鹿らしく寝る春の夜　漫多郎
春の夜コケシに別れる角隠し　喜多八
あてもなく歩くも楽し春の夜　風鈴
留守番を犬に預けた春の夜　浜小
二次会はビールとなつて春の夜　渓泉
春の夜も秋の夜もない闘病記　黒ん坊
読書とは惜しい今宵の朧月　真砂
花見客未だ呑んでいる春の宵　涙香
春の夜が更けるよ妻は里帰り　橋村

川雑　**濱寺病院支部句会**（大阪府）

三月二十五日　贈所新三報

春の宵一刻千金のクイズ聴く　句浪人
おぼろ月看護婦窓を明けてくれ　大三郎
ほろ酔にオーバー邪魔な春の夜　勢園
唯歩くだけで嬉しい春の宵　雅方
預つた小さい親類手古ずらせ　渓泉
遠縁を頼みの綱の履歴かく　喜多八
慶弔の額親類で云い合せ　真砂

川雑　**堺支部句会**（堺市）

三月二十五日　於　摩天郎居

八木摩天郎報

長屋今日家賃のことで集る日　左久良
表彰状社会は何も見てくれず　圭水
表彰状今日は社長の顔を知り　同
表彰の影に妻ある母もある　武助
死土産のやうな表彰してもらい　凡九郎
供出の表彰受けて麦を喰べ　南天郎
表彰の子供を訪えばわらを打ち　左久良
表彰の時計の音に励まされ　英二
受付子元将校の髭を持ち　雄声
融通がきかぬ受付らしい顔　凡九郎
受付が軽く見られて腹を立て　雄声
受付は笑つて名刺受けるだけ　英二
やゝこしい話受付聞きに行き　摩天郎
音のせぬ賽銭きゝめ疑われ　英二
若い妓をつれて賽銭派手に出し　雄声
男湯へ聞える女房の笑い声　南天郎
銭湯の一番乗りがやせがまん　一好
銭湯の前で二人は相別れ　博
番台が旦那来る日を知つて居り　凡九郎
銭湯の一番乗りは二号なり　雄声
銭湯へドヤ〳〵と来た子沢山　春翠
銭湯で逢えば先月切りで馘首　摩天郎

季節一品料理
江戸前にぎりすし
アベノ橋地下映画食堂街
梅里の店　**大萬**

★大万川柳（第四十回）を募る
兼題「集金」　路郎先生選
締切・六月十五日　句数五句以内
投句は　阿倍野区松崎町三丁目
一〇　大万川柳会宛

親子して恥かきに来たのど自慢　春翠
あの恥を大いに語る再起伝　武助
恥かしい病気は母にだけ話し　摩天郎

雑川 **備前支部句会**（岡山県）

三月二十日　於　久米雄居
浜田久米雄報

十年を無事に過した渡し船　菊路
アベックがほぼか染めてる渡し船　迷久
まだ岸で手を振つている渡し船　駄流児
渡し船島の噂を乗せて行く　節
渡し舟ゆれて二人の肩がふれ　正州
仕事着をつくろう針のこまやかさ　嶺句楽
仕事着もたんすに納め今日嫁ぎ　浄美
水ばなをすすり仕事着又動き　久米雄
仕事着がやつぱり似合う肩の巾　東岸子
すべり込みどうにか卒業だけが出来　やす子
真顔になつてパチンコ誘いに来　半仙
伯来の白粉と知る凄い鼻節　
電報も一緒に渡る渡し舟　柳風子
渡し舟ここから妻の里になり　同
せつかちなのが端にいる渡し舟　久米雄
毒舌がたたりあつさり首になり　東岸子

雑川 **貴生川支部句会**（滋賀県）

三月十三日　於　夢生居
黄瀬美秋報

母さんも少しはもてた二十代　観月
イヤリングそれマニキュアと二十代　俊子
二十代親に内緒の金も要り　紅月
二十代天国で逢うブロバリン　観月
二十代が四人隣のジャズが洩れ　斗志
M・S・A二十代のつばが飛び　夢生
転勤へ行李一つのひとりもの　美秋
流行も昔にかえるものもあり　溪峯
流行に縁ない服で見込まれる　四苦岸
満員車見送る人へ脊だけ見せ　斗志
から財布古い名刺が二三枚　凡骨

雑川 **阿倍野支部句会**（大阪市）

二月二十六日　於　西光寺
須崎豆秋報

油絵の額はうしろへさがつて見　豆秋
祖母嫁に来た日の簞笥押えられ　梅里
骨董の値打も知つて差押え　南風郎
差押え社長は行方不明なり　万楽
差押えよいしよ〳〵と愉しそう　乃文夫
三味線をあとにこつそり靴をはく　翠露
三味線に耳打ちをして舞初め　万楽
三番叟こゝを吉度と弾きまくり　黙平
舞納め三味へも礼を忘れてず　太路
爪弾きで恋しい人を想いつゝ　葉光
目の先のゴールへ男気盛り返し　十悟
借りに行く話へ妻も勇気つけ　凡九郎
バイキンを喰べる勇気があるか君　豆秋
その勇気褒めて若気をたしなめる　小松園
善行の記事は小さく隅にあり　武助
生字引などと事務所の隅に居る　恒明
幸運が未だその上の慾を云い　博也
幸運の椅子先輩の死を悼み　万楽
幸運を夢みつづけて未だ嫁かず　賀峰
幸運の末路が今朝の社会欄　松庵
迷げこんだ藤棚の下にわか雨　安一
見かえしてやる気給仕の講義録　柳慶
藤棚の下で金魚屋一服し　藤四郎
隣席の無礼を許す花の下　同
堤防の復旧花のない便り　かうたる
千鳥足ポストは徐けて呉れなんだ　九呂平
郊外に降りて解放された声　木陽子
藤棚がついて売家の値が上り　古苦柳
花の下のむさかづきに花うけて　万盛
代筆の方が照れてるラブレター　光堂
藤棚の花へ届いた子の背丈　妻棲子
五分咲の便りにプランを組替える　同
花の下思い〳〵の席が出来　司楼
花吹雪浴びてヂープも徐行する　十字星
藤蔓の先はもと来た棚をはい　土筆坊
千鳥足折るべからずの枝を持ち　いさお
酔いされの愚痴は幹事が聞いてやり　同
吟行のみな立ちどまる道しるべ　半休
使うコツ給仕のうちに叩き上げ　ほなみ
給料日までは待つまい花だより　同
千鳥足結局家へたどりつき　良坊
労資今日仲良く酔うた花の下　戊理智
藤棚へコーヒセットが光つてる　柳蛙
社長室変な女と見た給仕　素朴
千鳥足ふらふらふらと車よけ　みつる
おかわりみ遠慮のいらぬ手で盛られ　侃流洞

雑川 **鳥取支部句会**（鳥取市）

川柳桜まつり
四月十一日　於　久松山
大西八歩報

鯛焼が来て運動会らしくなり　たかし
末席も欲しいビールが運ばれる　法泉子
盃でビールを飲んでまだねばり　同
雪洞の我が家の屋号探してみ　小松
雪洞へ桜〳〵めに散つて行く　湖山
ぼんぼりに知らぬ酒場の名を見つけ　芳道
ふるさとを捨てた心に盆がくる　新雪
良心をちくりつとさす儲け口　八文銭
本心を問いつめられて瞳をそらし　芳道
心にもない強がりと妻は知り　粗粒
真心のこもる小包破れて来　法泉子
心持ちですと千円握らされ　喬水
心掛け五十になる子に言いきかせ　耕民
あいびきの場所を何時もの城にきめ　辰郎
城趾に大砲すえる日も近し　健造
我が古城壁落ち雨がもり始め　同
上下で見たかお城の花の宴　喬水
下馬先のあたり一杯のます店　村諷子
ガイドガールの声が変ると城が見え　法泉子
殿様はいづこ御城は花ざかり　湖山
天守閣生命の安い民が住み　日満
葉桜になつてようやく暇もらい　正人
もう花が咲いたそうなと残業し　星雨
桜咲く村は総出で鯛の網　村諷子
早咲きの桜が仕込みあわてさせ　芳道
夜ざくらへ落ち目の運は言はず行つ　日満
生活が許す範囲に桜を見る　喬水
託児所となる葉桜の寺の庭　法泉子
春霞鐘のひびきへ花が散り　八歩
花の下先週ならを繰りかえし　ト天

雑川 **大聖寺支部句会**（石川県）

四月十一日　於　卓風居
野村味平報

行き過ぎを詫びる始末の四月馬鹿　光郎
だまされた惜しさが残る四月馬鹿　酔羊
四月馬鹿末の賢い子が笑い　素百々

うつかりと聞き返してる四月馬鹿　よ
呼電話素足が痛いあわて様　光郎
裏銀だ命懸けだと誘惑し　卓風
誘惑を押し切る程に世間馴れ　味平
誘惑のそれと知つたる娘の機敏　桃園

川雑　**玉造支部句会**（大阪市）

三月二十三日　清水白柳子報

集会に大阪時間困るなり　草白
嬉しさに捻巻き過ぎて叱られる　さかた
時計見て今おそしと茶漬する　友森
せく時の身体は前へのめりそう　朝子
時たてば解決すると楽観し　西出
待つ時の五分中々動かない　一栄
修理した時計今度はよく進み　真沙魚
表彰の時計の台座吾が名あり　同
吊皮へこれ見よがしの金時計　雅美
時計三つみなそれぐの時をさす　六竜子
春眠暁を覚えず目覚しけつたるか　白柳子

川雑　**倉敷支部句会**（倉敷市）

四月十八日　於　観竜寺　田垣方大報

天井の音にも処女はおどかされ　千代春
天井が無うて百足も降つてくる　吉男
天井の蠅も数えた闘病記　鯉風
落ちそうな校舎の天井ほつとかれ　実穂
天井を吹き抜く程の意気に崩え　千容
天井が碁盤に見える程にこり　素身郎
天井は三角テント村の朝　谷水
「乱歩」読む今宵天井しきりなる　春日
只ドルに媚びて今夜も青天井　馬楽
天井へつくよな丈ですねかじり　越鳥
天井は見のがし底は買い損ね　香長
熊の出る村も市制が敷れ初め　越鳥
発展のダムへ祖先の血を残し　香長
発展的解消だとは手前味噌　一哲
発展へ税の重荷を背負わされ　春日
発展に押され立ち退く荷をまとめ　桂月
憂うつな原因今朝の手紙らし　素身郎
憂うつを蹴飛ばす酒も飲みかねる　天泉
当直の看護婦ブギで廻つて来　谷水
看護婦に叱られてまで食いたがり　耕水
貰ひ泣きする看護婦のまだ若く　素身郎
看護婦も夢がありますお茶お花　日出雄
一寸だけ見たい娘の日記帳　明心
一寸だけ待つてゝねと薄化粧　宗歩
一寸なら待つてもくれる田舎バス　夢刀
十代で一寸呵えば家が建ち　聴牌
貯金箱母一寸借り〳〵　鯉風
世界的名をはせてるは小学出　千容
几帳面の居眠り降りるここで醒め　谷水
居眠りが慌てゝ降りる終電車　星光
居眠りを知つてたらしい昇給額　晴路
食べかけた箸を握つたまゝ眠り　秀鮒
居眠りはペン持ちなおし持ちなおし　まさを
居眠りの母に苦労の脊の円み　天風
蝶ネクタイ君も恐妻かと言われ　一善
ネクタイをゆるめて音痴が番を待ち　聴牌
勤続へネクタイもまた擦り切れる　桂月
ネクタイへほのかな思慕をこめて撰り　天風
出張へしぶいネクタイ出して呉れ　夢刀
ネクタイを結ぶ稽古もして嫁ぎ　馬楽
信頼の出来る夫の渋いタイ　斜木
人間を学歴だけで評価され　一善
学歴を鼻にぶらさげ四面楚歌　千容
真面目さが学歴よりもお気に召し　聴牌
学歴は無いが喰うのに事欠かず　香春
学歴の割に悪筆親ゆずり　種三
居眠りは義理にも出来ぬ通夜の席　斜木
終点へ来て居眠りの照れくささ　春日

川雑　**篠山支部句会**（兵庫県）

小西無鬼報

待つ受話機にはいる女将の話声　大木
街緑でしやべらせ聴取料も取り　和美
蛙さえときゞ〳〵黙る話声　尋四
話し声聞えず笑顔ガラス越し　莽花
次の間で聞いてはならぬ事を聞き　無鬼
酔いましてなんぞと罪を酒にきせ　酒井
脱線へもう割勘も飲み次第　汲流
二次会のそこ迄記憶ある脱線　左文字
脱線で遅れて無事な顔を見せ　白猫児
脱線の帽子を探す逆コース　ひか平
脱線は駄目よとワイフ念を押し　尋四
脱線の分は女房に黙つとき　無鬼
足跡は駅へばかりの雪の道　左文字
足跡が残つて居ると要怖え　句士
学校の田植足跡ばかり出来　麦亭
犯人は猫ときまつた足の跡　無鬼

川雑　**出雲支部句会**（出雲市）

四月九日　於　大和倶楽部　尼緑之助報

妹の素足が白い磯の波　壮
お百度を踏む一心の素足なる　鳳城
揚雲雀素足へ伸びる若い夢　岬月
前文長々と結局無心なり　梢鳥
前へ進め進めの時代に戻りそう　章坊
合併の前は平和な村でありし　勉
もう負けていない代表前に出る　緑之助
前かがみして誘惑に負けて来る　独仙
だみ声の父に押売あらたまり　詩朗
止めろとも云えず社長の渋い声　木里
ほゝえみが忘れられない朧月　重信
天皇のほゝえみクローズアップされ　代仕男

人気歌手あのほゝえみも芸の内　雲平

川雑布哇支部　**ウイロー社句会**（ハワイ）

二月七日　於　柳云亭　古川魔花麗報

竹馬で父より高い子の得意　闇魔生
自動車が千鳥で帰る午前二時　草一郎
決勝へ一鞭馬の鼻が出る　野渉
年賀状の上では馬齢相が加え　木公
馬鹿息子取柄はたつた唄一つ　泉水
ILOVEYOU丙午でも何のその　峰雪
ガウボーイが気取つて木馬に乗ると云い　保枝女
屋上へ正午の恋を捨てに行く　暁舟
子午線を越えて同じ日また迎え　迷朗
午飯に誘い無心と腹を決め　快夢起
騎兵隊愛馬と共に弾の中　はる子
馬までも花道で鳴く桐一葉　葛彌
馬の脚晴の舞台の夢を持ち　柳葉
馬嘶する腕とは別の恐妻家　虹橋
生仏馬鹿正直が子に響く　笑有
馬の脚舞台横切るだけの芸　魔花麗

馬の芸脚ぶみすればそれですみ　拝山

帝化川柳会（大阪市）

三月十九日　於　帝国化工大阪工場　佐野白水報

この奥に居ます看板路地へあげ　恵撰子
看板と書いた看板はげて居り　登志晴
看板に信用があり値が高し　京一楼
看板の絵に偽りがある曲芸団　耕山
看板を塗り替え不況乗り切る気　甲子朗
うるさ型敬遠されて一人飲み　雅楽太
一文句あるうるさ型末座に居　三平
うるさ型さんざ文句を言うて喰い　英治
うるさ型すぐ人権を振りかざし　寛峯
うるさ型一人が決議無駄にする　白水
縁談と知るアベックの手相なり　華泉
秀吉の手相見たように易者云い　白水
金運の手相で質屋通いをし　翠風
ほめられた手相へいまだ平社員　雅楽太
荒波へ手練の腕のまぐろ船　一平
握りたてとろりと舌にまぐろ寿司　京一楼
銀飯へ乗つてまぐろの味もさえ　一朗

南区医師会　杏林川柳会句会（大阪市）

三月十六日　於　迷路居

散歩にでもいらしてはさ邪魔にされ　中島生々庵報
散歩にも金がいるかと父がきき　生々庵
早朝の散歩三日であごを出し　杏子
銀婚も過ぎて散歩もまゝならず　比呂史
妻も亦見えつ隠れつ散歩する　珊枝郎
病み上り散歩するのも手を借りる　鳥耕
散歩してアベック許り見て帰り　瑞川
早朝の散歩ひろい屋と知己になり　同
すぐ帰る筈の散歩が酔うて居る　生々庵
長襦袢恥じらわぬ程妻も老け　比呂史
長襦袢バジャマにお株奪われる　一哲
長襦袢媚薬の様に一寸効き　阿茶
手古舞の片袖うれし長襦袢　生々庵
入学に母と母との仲たがえ　阿茶
入学も野球の腕でゴールイン　珊枝郎
入学の発表前にしらせて来　阿茶
入学へ悲喜交々の暮し向き　一哲
入学へ父はそうかと云つたきり　路郎

みをつくし川柳会（大阪市）

三月九日　於　天王寺中学校　戸田古方報

念仏へちと相済まぬ内輪もめ　雄声
満ちたりた思念仏唯となへ　凡九郎
何億の金が動いたメモもあり　正斗
廃物も我が社の為にメモとなり　一好
あるだけの名刺がメモになつていた　古方
波瀾万丈ことの起りはメモでありのぼる　凡九郎
友達に出逢い臨時の職に付き　義宏
犬も歩けばと失意なだめられ　梨花
待ち呆け靴でも磨いてもらおうか　凡九郎

南海電鐵川柳会（大阪市）

於　親和寮　友淵貴山報

落書の傘もうれしい君と僕　のぼる
愛犬が錠前がわり共稼　南天
対立の思想であつた君と僕　青砂郎
錠前の行方が無事な玩具箱　俊翠
相談の果が養子に行けと云う　雄声
伝言板恋しき君の発つた後　同
伝言板隅に手袋ぶらさがり　春翠
告知板たつた二行が喜ばせ　同
旅からの便り錠前かけておけ　貴山
相談に電車賃から借りてゆき　同
O・S生とあんな年寄伝言板　同
死ぬまでがライバルだった君と僕　圭水
伝言板今書いたのにもう消され　同
告知板冷い風がまともすぎ　同
相談と逃げる手もある寄附の金　吉川
結論を出して相談後になり　中村
相談は煙草一個で足らぬなり　香山
君と僕ブラックリストにのつていた　凡九郎
告知板また税金が迫つて来　摩天郎
弁護士へする相談は金が要り　同
その若さ伝言板であとを追い　路郎

明和病院川柳青蛙会（西宮市）

四月十一日　山本九里三報

戦さ敗け首途の港へ辿り着き　紫雲
かぎりなき此の嬉しさを親にかく　鶏声
何故もつと早く来ないと貸してくれ　紫朗
ジャズの音へ月給袋軽すぎる　静峰
浮草の影に蛙の目がのぞき　桔梗
影一つ横町へ消えて元の月　五月坊
菱餅に平和の春が続きそう　至不也
窓にとまるハエにも一時うさはらし　金太郎
友情にすがりいくらか借るつもり　白馬
ニコヨンになることは首途の夢になし　九里三
面影も気もそつくりな子を残し　満秋
連名の友の見舞へ寝付かれず　牧人
我が影と語り孤独も亦たのし　同

飛燕往來

★川上日車氏（滋賀県）より

—路郎宛—

拝復おはがきありがたく拝見しました。御不快だつた趣き、知らずに御手数かけましてすみません。もう快方に向いつゝある由此上とも御加養祈ります。御心配かけました「雪」十八冊とも小生の中学友達だつた石浜純太郎氏保存所持、揃えて送つてくれました。川柳史は資料乏しきまゝ、物語風に執筆するつもり、考証は迚もだめと観念しました。その節は何かとよろしく願います。皆さまへよろしく、日車庵へ移り次第すぐ知らせます。

—四月十八日附—

★福田山雨楼氏（横浜市）より

—路郎宛—

啓　五月号昨三日拝受致しました。鶴首していただけに非常にうれしく拝見致しました。先生の御病気が想像していた以上に御難渋であつたことを承り吃驚致しました。最早御快癒のことと拝察致しますが、おあとを御大切に遊ばされますようお祈り申上げます。五月号の長野晴浜氏の玉稿は仲々行届いた鑑賞眼で、流石は老大家哉と敬服に堪えませんでした。祭日四方山話はピッタリと時季に適した好題目で編集者の頭のよさに敬服しました。東洋樹兄の玉稿も非常によい文章で考えさせられるものが多々ありました。春巣博士のストマイについての玉稿は小生特に深い関心を以て拝見しました。尚同博士が御快癒遊ばされて大いに安心致しました。白星君は福岡へ転勤の由生活的に変化に富んだ同君の執筆が望まれます。五月号は内容が充実していて先生の御執筆がない淋しさを補つてる感がありました。気候不順の折柄御加養専一にお祈り申上げます。敬具

—五月四日—

柳・界・展・望

▼本社六月句会は十二日午後六時から下寺町二丁目市バス停前光明寺で開催▼大阪通信病院川柳会は五月廿二日午後二時から吉田斜水氏送別句会として三階図書室に於て開催▼南区医師会文化部杏林川柳会は五月廿五日午後七時半から瑞川居で開催▼南海電鉄川柳会は五月廿四日午後六時から粉浜の親和寮で開催▼本社主催朝日新聞社後援の第二回日本ステート・フエア全国川柳大会の入選句を五月十五日午後二時から近鉄沿線あやめ池遊園地ステート・フエア場内野外劇場に於て(別記掲載)発表と共に入賞者の表彰式を盛会裡に挙行した以上何れも路郎主幹出席▼川雑池田支部句会(大阪府)は六月二十日午後五時半から阪急電鉄本社四階会議室で開催される。兼題「鬼門」「ナイター」「金魚」の三題▼川雑淀川支部句会(大阪市)は六月九日午後六時から武部香林居(東淀川区三津屋北通四ノ二九)で開催される。兼題「水」「代筆」「膝」の三題▼大阪逓信病院鳥ケ辻川柳会は六月二十日、青葉吟行として開催される▼川雑備前支部(岡山県)では支部創立六周年句碑建立三周年記念川柳会として四月二十四日午後六時から媒居に於て開催、本社から緑雨、春巣、淡舟の三氏が出席▼長野県下川柳大会が五月十六日午前十時から長野市長野駅前紫雲寮で開催▼広島川柳会五月第一例会を五月五日午後六時から三栄堂に於て開催▼新潟県下川柳大会が六月六日、長野市悠久山公園悠久ホテルで開催される▼川雑堺支部(堺市)は五月二十二日午後六時から摩天郎居に於て開催▼川雑倉敷支部句会(倉敷市)は四月十八日午後一時から本町観竜寺で開かれた▼みをつくし川柳会(大阪市)は五月十一日午後六時から天王寺中学校に於て開催▼川雑岡山支部五月句会は九日に山陽旅館で開かれ知事盃は小原宇柳氏が引続き獲得▼川雑阿倍野支部(大阪市)は五月二十六日午後六時から阿倍野区松崎町二丁目、西光寺に於て開催▼玉野市文化祭川柳大会(岡山県)は五月十六日に玉子ヶ嶽清峯温泉で開催された▼金光呉人氏追悼句会(西宮市)が明和川柳青蛙会の主催で五月十六日明和病院で催された▼川雑倉敷支部五月句会(倉敷市)が十六日に谷水氏の山陽川柳第一席入賞祝賀を兼ねて行われた▼広島川柳会第二例会は五月十五日午後六時から広島貿易館で開催▼川雑弓削支部句会(岡山県)は五月一日午後六時からすぎもと呉服店で開催▼川雑備前支部では五月十五日に吉永町合併記念句会を吉永町公会堂で開催▼前号で発表した大万川柳三周年記念川柳大会(大阪市)は五月二十三日に変更開催された▼ふあうすと川柳社(神戸市)は創立二十五周年記念川柳大会を五月二日神戸市看護会館で開催▼福岡川柳倶楽部は六月号を以て通刊七十号刊行の由▼開国百年記念川柳大会(横浜市)が横浜川柳懇話会、市教委主催で四月二十九日正午から西区紅葉坂の紅葉園で開催された▼津田千舟氏(貝塚市)は散歩と入浴を許可された由▼伊藤茶仏氏(石川県小松市)は四月二十三四両日、国際見本市見学の為め上阪▼久保和友氏(滋賀県)は四月廿三日から五日間伊豆大島の旅をされ天皇誕生日に二重橋を渡られたと▼不二田茂子さん(一三夫氏の令嬢)の手で生野中学図書室に「川雑」が備付けられることになつた▼上林粗影氏(宇部市)は沖宇部炭鉱晴風寮の寮長に当選された▼広井南天郎氏(堺市)は今回大阪市住吉区墨江中八丁目五三府営西国住宅二六四号に転居▼川雑小郡支部(山口県)は支部長長野井蛙氏が宇部市へ転じられたので蒔津柳虹氏が支部長に推された。(摩)

川雑 川柳まつりに就て

★さきに本誌三月号で発表した「川雑川柳祭」は川柳不朽洞会の常任理事会で協議の上、「川雑川柳まつり」と正式に命名し社の年中行事の一つに加えることになつた★全国の川雑各支部及川雑系の句会では本社と共に、毎年七月十日全国一斉に「川雑川柳まつり」句会を開催し、その会に於ては各句会共通の特別出題により作句することになつた。この出題者は路郎主幹であり、それ等の応募句は全部路郎主幹の選によつて拔を競うこととなつた。但しこの一題を除く兼題・席題はそれ〴〵の会で題及び選者を自由に決定することは従来の会と同様である。★「川雑川柳まつり」を毎年七月十日としたことは我等の恩師麻生路郎先生の誕生日に相当するので、この吉日を卜し「川雑川柳まつり」を行うことにしたのであるこの記念すべき行事には本社をはじめ全国各支部及川雑系各会が一斉に参加し、この佳き日の欲びを分ち合うと共に栄えある優勝楯を目指し覇を競う事とした。★各会はこの日を期して新人の誘導に全力をそそぎ斯道の発展昂揚に尽されたい。★特別兼題は各支部で予め責任ある選者を決定し置き一応予選し出句既定数を本社の「川雑川柳まつり」係宛に七月十日までに送附されたい。係は全部取纒めて清記(無記名)して路郎先生の選句を受け秀逸一句を優勝句とする。★各会は先生の選句の繁をすくなくするため「川雑川柳まつり」参加出席者数の三分の一を出句数とする(例えば出席者三十名の場合はその会から十句)但し出席者十名以内の場合一会の出句数は三句とする★提出句は一句宛句箋(横一寸二分、縦六寸)に清記し裏面に句主の住所・氏名・雅号及び所属の会名を明記されたい。★大阪市内及びその近郊の支部及び会に属する会員はこの月に限り川雑本社句会に合流してこれを行い、川雑支部及び川雑系の会に所属しない出席者及び川柳不朽洞会常任理事が優勝句に入選した場合には優勝楯は本社の獲得となる★優勝句の作者個人に対しては路郎賞を贈呈し、優勝作家を出した会に対しては優勝楯を贈る。(但楯は翌年の「川雑川柳まつり」の二週間前に川柳雑誌社に返還するものとする)★入選句は「川柳雑誌」に発表★以上は「川雑川柳まつり」の大筋にすぎない。この会をより愉快に、より朗らかに運営することは各会の自由である。この会に柳友の懇親宴を持つことなどもその一つである。

川雑 川柳まつり記念
路郎先生揮毫川柳手拭
七拾円(送料共)希望者に頒布します。予約〆切は六月十日限り、一人で数枚申込まれてもよろしいが、なるべく各支部で取まとめて下されば好都合です。代金は申込と同時に御送付下さい。(切手可)
大阪市住吉区万代西五丁目二五番地
川柳雑誌社
振替口座大阪七五〇五〇番

公・私・雑・記

★雑草雑木の庭にも新緑の美しさを感じている。★前号はなか〳〵好評だつた。★私の病臥中にステート・フエアの全国川柳大会をやることになつたが、どうにも私が動かないとまとまらないので自動車で走りまわつたところが、折角快くなりかけていた病状が悪化し、一日に五、六回も下痢するようになつた。全国大会としての一部二部のプランを建てたが、どんなに急いで見ても準備が出来ないことが、ハツキリしているので、二部の企画は中止し、一部の企画だけを断行することにした。それも時日がなくて弱つたが兎に角、別稿のように誌上での全国川柳大会として決行、あやめ池では野外劇場で、マイクによる入選句の発表と入賞者の表彰式を行つて、川柳のために大衆へ呼びかけた。これだけでも病中の私にとつては重荷であつたが、皆さんのお蔭で断行し得られたことを感謝している。★私のような仕事をしている人間には静養と云うことは不可能だと云うことを今度の病臥でつく〳〵と知つた。結局死へ頭突きをもつて行くような仕事をしながら一生を終えるより仕方がないであろう。まだ全快と云う訳でないのも、そんなところに原因しているのである。しかし、のつぴきならぬ仕事だけは病苦をおしてでも、切りぬけて来たのでこの調子なら、七月の私の誕生日には心身共に旧に復することが出来ようと思つている。★別稿に発表されたように「川雑川柳まつり」と云う年中行事が設定されたが、これは私たち川柳人にとつてのメーデーに類するものとして大いに盛んにして欲しいと思う。私の誕生日をその日にされたことは光栄ではあるが、一面心苦しくもある。まあ、川柳の夏まつりぐらいに考えて浴衣がけや上衣なしの会をやつてもらいたい。（路）

不朽洞会から

▼中島生々庵氏（大阪市）は母堂三回忌法要を五月三日生々庵居に於て相営れ、本会から路郎主幹も参席「三回忌一家の無事を申しあげ」を霊前に供し、ありし日を追慕せられた▼大阪府立図書館内大阪府文芸懇話会は四月二十五日正午から阿倍野区三丁目菅楯彦画伯邸で開催、本会から路郎師、中島生々庵氏が出席、盛会であつた由▼種瓜平氏（大阪府）は「関西グラフ」に活躍されているが近く「諷刺漫画」画集を友人知己発起の下に発行される由、斯界の為めお嬉び申し上げる▼弘津柳鏖氏（下関市）は四月十二日から京都、鎌倉、東京の旅をされ二十日帰宅された由▼河村日満氏は川雑鳥取支部主催で四月十一日に「川柳桜まつり」をされた▼山田季賚氏（広島県）は四月廿八日に滋賀県へ帰省され三十日に大阪へ出て北川春巣博士を訪問、五月二日ふあうすと廿五周年句会に出席され三日に帰広された▼服部十九平氏（岡山市）の文信によると、岡山県庁で（病院の日）の仕事として県下の病院学農学部教務係長に栄転▼長野井蛙氏は宇部市港町一丁目宇部鉄道職員会館館長に栄転された▼稲葉鳩花氏（大阪市）は五月十日華燭の典を挙げられた▼福島鉄児氏（岡山県）の文信によると弓削町は四ヶ町村の合併で四月一日から久米南町として発足、初代町長に柳人在里三芳氏（前弓削町長）が就任されたと▼山本葉光氏（大阪市）は五月三日に新和歌浦に遊ばれ「宴会の隅で碁を打つ雨の宿」の句を寄せられた▼戸倉普天氏（兵庫県）は五月十日に小学校時代の同窓等が夫人同伴で白浜、串本、勝浦、那智、瀞方面に遊ばれた▼田垣方大氏（倉敷市）は四月十日に倉敷レーション工場の川柳研究室に招かれ句会を持つたとのこと、▼水谷谷水氏（倉敷市）は山陽川柳第四十八回の読者文芸の第一席に入選された▼塩浜一路氏（枚方市）は星ヶ丘病院に入院されているが今度外科病棟に移られた▼浜田久米雄氏（岡山県）は元気で、屋根の修理などをやつていられるとのこと尚岡山駅能率助役に栄転された▼田村藤波氏（岡山県）は今回予而新築中の家屋竣成につき、岡山県英田郡美作町湯郷五六五ノ二に転居せられた▼阪田良坊博士（下関市）は四月廿五日に長門の湯本温泉から鉄道嘱託医山口県歯科協議会総会へ顧問として出席されたとの文信があつた▼内藤きさ子氏は家庭の事情で五月限りで退会された。（摩）

柳人交歓暑中広告を募る

是非一ト口は！

★一ト口金二百円。幾口でも申込まれたい一ト口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ乞う一ト口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は六月二十日限

★広告料は前金のこと

川柳雑誌社

募集

課題吟募集

散歩（廿句）吉田水車選
自惚れ（廿句）浜田久米雄選（六月二十日締切）
嫂（廿句）川村好郎選（七月二十日締切）
日給（廿句）国弘半休選

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）（毎月廿日締切）

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▲『課題吟』は何人でも投句が出来る。
▲『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan

B列5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌　第九巻第六号
（禁転載）
定価　四〇円（送料四円）
半ヶ年　二六四円
一ヶ年　五二八円
昭和廿九年五月廿五日印刷
昭和廿九年六月一日発行
大阪市住吉島嶋内芳代西五丁目二五番地
福嶋倉雄
行印刷人　麻生幸一郎
大阪市住吉島嶋内芳代西五丁目二五番地
発行所　川柳雑誌社
振替口座　大阪七五〇五〇

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）　昭和廿九年五月廿五日印刷納本・昭和廿九年六月一日発行

THE SENRYU ZASSHI

NO・325

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

胃潰瘍

胃痛・胃酸過多
十二指腸潰瘍
予防・治療

ファイナリン

潰瘍を促進させる胃液酸度を低下させ、同種剤中副作用がいちばん少く、価格も低廉な新原因療法剤です。予防にもよい。

山之内

大阪名菓
あかしかまど
浜氏と最中

百貨店著名菓子店にあります
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九
民かまど本舗
電話㊥三四〇九

清涼飲料
富屋
せんば
いつものがいゝと富屋へ電話なり
御集会用にも御用命を
大阪東区唐物町一丁目井池
電話船場(25)三三八八一番

本社六月句会

時—六月十二日（土）午後六時
處—大阪市天王寺区下寺町二丁目
（市電下寺町・日本橋三電停前下車）
於　光明寺
題—「棚上げ」・「名物」・「隣り」
柳話　麻生路郎
　　北川春巣

川柳雑誌社句会部